中宿在家Ⅱ遺跡

—カインズホーム安中店建替工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1999

安中市埋蔵文化財発掘調査団

中宿在家Ⅱ遺跡

—カインズホーム安中店建替工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1999

安中市埋蔵文化財発掘調査団

遺跡全景（北東から）

遺跡全景（西から）

序

安中市は群馬県西部に位置し、古くは東山道、近世には中山道、現在は国道18号が通る交通の要衝です。西には妙義の峰々がそびえ、北西には浅間山が顔を覗かせています。この浅間山は過去に何回も大噴火を起こしています。江戸時代の天明３年（1783）の大噴火が有名ですが、平安時代の天仁元年（1108）にも大噴火をおこしており、当時の上野国から朝廷に被害を報告しています。中宿在家Ⅱ遺跡から発見された水田址はこのときの水田の跡です。浅間山から30km以上離れた中宿にも大量の軽石が降り積もり、水田や水路を埋めてしまっていたのです。

中宿は安中市の東部に位置し、碓氷川と九十九川及び柳瀬川が合流する場所で、水田地帯となっています。南には野殿の丘陵を望み、北東には鷹巣の崖がそびえています。江戸時代には中山道、現在は国道18号が通り、交通量の多い場所の一つです。中宿には、国指定重要無形民俗文化財の中宿の糸操燈籠人形（指定名称は「安中中宿の燈籠人形」）があり、世界に類を見ない独特な芸能です。また、中宿の蓮華寺には県指定重要文化財の「栄朝禅師木像」（鎌倉時代）が祀られていて、鎌倉街道（中世東山道）がこのあたりを通っていたことを物語っています。中宿在家Ⅱ遺跡から発見された磁器、刀、古銭といった遺物や掘立柱建物址群や井戸などの遺構は、水田が天仁元年に埋没してからしばらくしてここに館が造られていたことを物語っています。このように中宿在家Ⅱ遺跡の調査からは、国道18号バイパス建設工事に伴って、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した中宿在家遺跡とともに中宿の歴史の一端を伝える資料が得られました。この報告書を通して改めて中宿、および安中市の歴史を考える資料になることを願っております。

最後に、発掘調査にご協力いただいた関係者、そして空っ風の吹く中、発掘調査に参加された方々にお礼申し上げます。

平成11年５月31日

安中市埋蔵文化財発掘調査団
団　長　　山　中　誠　次

例　　言

1　本書は株式会社カインズが実施したカインズホーム安中店建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査を実施した遺跡は中宿在家Ⅱ遺跡であり、遺跡略称はD－14である。

3　試掘調査は、平成７年度国庫補助金及び県費補助金の交付を受けて行った。また、本調査及び遺物整理は株式会社カインズからの委託金により実施した。

4　試掘調査は平成７年11月８日～10日までの間に実施し、本調査は同年11月13日～12月25日までの間に実施した。また、遺物整理は、平成８年１月８日～12日までの間と２月１日～29日までの間、及び平成10年度に断続的に実施した。

5　試掘調査は安中市教育委員会直営で行い、社会教育課文化財係主任（文化財保護主事）大工原豊及び同主事深町真が担当した。本調査は安中市埋蔵文化財発掘調査団で行い、発掘調査員大工原及び深町が担当した。遺物整理は大工原、深町、主事井上慎也が担当した。

6　遺物整理作業の分担は以下のとおりである（敬称略・五十音順）。

全体の総括　　大工原

本文の執筆　　深町、井上、Ⅶ＝（株）古環境研究所

遺構図の作成　　飯塚洋子、大塚清美、金井京子、下　マス江、日田利江、安田京子、山崎順子、山崎　恵、清水　正、須藤ダイ、田中利策、山口良江

遺構図のトレース　　伊田百合子、平出紀子

遺物の分類・観察表の作成　　深町、井上、吉沢栄子

遺物実測図の作成　　鉄製品・石製品：筑井美佐子
土器類：高瀬敦子、筑井、吉沢、深町、井上

遺物のトレース　　吉沢

遺跡分布図及び地図等の作成　　伊田、古立真理子、吉沢

復元図の作成　　白石純子

復元図の作成指導　　大工原

7　遺構写真の撮影は大工原、深町が行い、航空写真の撮影は（有）青高館に委託して実施した。

8　地質分析、植物珪酸体（プラントオパール）分析、花粉分析、寄生虫卵分析、出土炭化材の樹種同定は株式会社古環境研究所に委託して実施した。

9　青磁、白磁、陶器の一部については、関口廣次氏にご指導・ご助言をいただいた。

10　発掘調査における記録、出土遺物はすべて安中市教育委員会で保管している。

11　発掘調査組織は下記のとおりである。

教育長（団長）	山中誠次
教育部長（副団長）	真下　仁（平成９年３月転出）
	阿久津浩司（平成11年３月退職）
	鈴木　勝
社会教育課長（事務局長）	多胡泰宏（平成９年３月退職）
	横田道夫
文化財係長（事務局次長）	杉山　弘（平成９年３月転出）
	佐藤輝男
主任・文化財保護主事（発掘調査員）	大工原　豊
主任・文化財保護主事（発掘調査員）	千田茂雄
主任	清水芳秋（平成11年４月転入）
主事（発掘調査員・庶務係員）	深町　真
主事（発掘調査員）	井上慎也

12　発掘調査従事者

浅川たけ子　飯塚洋子　漆原高司　大塚清美　佐藤里津子　清水　正　下　マス江
高橋とく子　多胡　静　田島一雄　田島かつ子　田島せい子　田島元治　田中利策
西村水子　日田利江　丸岡民子　宮沢美知子　森田洋子　安田京子　山口良江
山崎順子　山崎　恵

13　遺物整理従事者

伊田百合子　白石純子　高瀬敦子　筑井美佐子　平出紀子　吉沢栄子　古立真理子

凡　　例

1　遺構実測図は1/80を基本とした。基本層序、畦畔セクション図は1/40とした。

2　遺構図中の北マークは磁北である。

3　遺物実測図の縮尺は下記のとおりである。

土器・陶磁器：1/4　石製品：1/3　鉄製品：1/4

4　土層説明中の記号とその意味は以下のとおりである。

色調：暗＜明、明＞暗

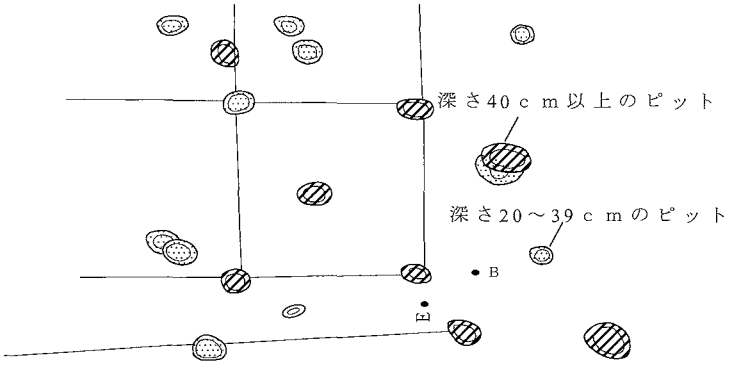
しまり・粘性:◎ あり　○ ややあり　△ あまりない　× ない

混入物:◎ 大量　○ 多量　△ 少量　※ 若干

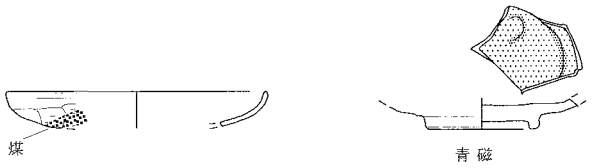
RP：ローム粒子（溶け込んだ状態）　RB：ロームブロック（固まりの状態）

5　土色及び土器等の色調は『標準土色帳』によった。

6　深さ40cm以上のピット、及び深さ20～39cmのピットは網掛けで表示した。



7　土器についた煤、陶磁器は下記のスクリーントーンで表示した。



目　　次

口絵
例言
目次
Ⅰ　調査の経緯……1
　1　調査に至る経緯……1
　2　調査の経過……1
Ⅱ　調査の方法……2
　1　発掘調査の方法……2
　（1）調査の方針……2
　（2）調査区・グリッドの設定……2
　（3）遺構確認面……2
　（4）遺構の調査方法・記録方法……3
　（5）調査機材……3
　2　整理の方法……4
　（1）整理の方針と目的……4
　（2）遺構の記載方法……4
　（3）遺物の記載方法……4
Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境……5
　1　地理的環境……5
　2　歴史的環境……5
　3　層序……9
Ⅳ　平安時代の遺構……10
　1　Ａｓ－Ｂ層直下水田址……10
　2　溝……10
Ⅴ　中世の遺構……14
　1　掘立柱建物址……14
　2　柱穴列……23
　3　竪穴状遺構……23
　4　井戸……23
　5　土坑……23
Ⅵ　近世の遺構……28
　1　溝……28
Ⅶ　遺物……30
　1　中世の遺物……30
　2　近世の遺物……30
Ⅷ　成果と問題点……34
　1　中宿在家Ⅱ遺跡のＡｓ－Ｂ層直下水田址の性格……34
　2　掘立柱建物址群について……35
　3　中世の中宿について……43
Ⅸ　自然科学分析……44
　1　地質分析……44
　2　植物珪酸体（プラントオパール）分析……47
　3　花粉分析……54
　4　寄生虫卵分析……57
　5　出土炭化材の樹種同定……60

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経緯

平成７年６月７日に株式会社カインズから安中市教育委員会へ店舗建替工事の照会があった。この店舗建替予定地の隣接地で、国道18号バイパスの建設工事に伴う群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団による平安時代の水田址や掘立柱建物址群等の調査が行われており、該当地域内にも同様の遺構が存在することが確実であった。したがって、店舗の建替工事を実施する際には文化財保護の措置が必要である旨の回答を同年６月29日に行った。

その後、株式会社カインズと市教育委員会の間で埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を行い、遺跡に影響をこうむる部分約4,000㎡について、安中市埋蔵文化財発掘調査団が発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになった。

2　調査の経過

試掘調査は前述のように平成７年11月８日～10日までの３日間実施した。試掘調査の結果、店舗建設予定区域内に浅間Ｂ軽石直下水田址や溝が存在することが確認された。このうち、店舗が建設される部分（約4,000㎡）を本調査することになった。

本調査は平成７年11月13日～12月25日までの間延べ43日間実施した。発掘調査はバックホーによってⅡｂ層まで掘削し、ジョレンを使って遺構確認作業を行った。表土掘削が完了した後、調査区全体で水田址の畦畔を確認するとともに溝、土坑、ピット等の遺構を調査していった。畦畔については壁際の数地点で断ち割りを行い、土層の堆積状況を記録した。また、調査区南西部から多数のピット群を検出し、その配列から、掘立柱建物群が存在することが明らかとなった。その後、16mごとに基準杭打ちを行い、この基準杭を基にして４mの小グリッドを設定した。発掘調査がほぼ完了した12月14日に遺跡全体の航空ビデオの撮影を行い、12月18日～22日に遺構平面図を作成して本調査を終了した。

（深町　真）

Ⅱ　調査の方法

1　発掘調査の方法

（1）調査の目的と方針

本調査区は、国道18号改築工事に伴う発掘調査により浅間Ｂ軽石層直下の水田址と中世館址が確認された部分に隣接していることから、当該期の遺構がさらに調査区域内にも広がる可能性が予想された。したがって、発掘調査は、これらの遺構との関連性を含め、水田址の規模と中世における中宿地区の集落（館址）を解明する資料を得ることを目的とした。

（2）調査区・グリッドの設定

a. 調査区の設定

試掘調査は店舗建設予定区域（9,126㎡）に、南北方向に幅２ｍのトレンチを各々20m間隔で５カ所設定した。西から順番に第１トレンチ、第２トレンチ、第３トレンチ、第４トレンチ、第５トレンチと呼称した。試掘調査の結果、遺構が確認された約4,000㎡を本調査の区域とした。

b. グリッドの設定

位置の記録方法としては、従来から安中市で行われている100m×100mの大グリッドと４ｍ×４ｍの小グリッドを併用する方法を採用した。小グリッドの呼称は北から南へアルファベットでＡ、Ｂ、Ｃ、‥‥、西から東へ算用数字で１、２、３、‥‥であり、グリッドの名称はその北西隅の杭の名称とした。そして、包含層調査の場合、４ｍ四方の小グリッドをさらに４分割し、北西隅から南東隅に、ａ、ｂ、ｃ、ｄとグリッドの最後に付して記録することにした。

発掘調査では、当初、グリッドの基準となる杭の位置は、調査区に合わせて任意に設定し、その後、国家座標への取り付けを行った。Ｈ－11グリッドがＸ＝36979.501、Ｙ＝－81975.372である。

（3）遺構確認面

本遺跡の基本層序は第３図に示した通りである。浅間Ｂ軽石層（As－Ｂ層、Ⅱｂ層）が遺跡全面にわたり堆積していたため、バックホーによりⅡｂ層上部まで掘削し、Ⅱｂ層の下部で遺構の確認を行った。

（4）遺構の調査方法・記録方法

発掘調査した遺跡の遺構の調査方法は第1表のとおりである。このうち、航空ビデオ利用による平面図作成法やロールビニールによる土層転写法、分層16分割法、排土坑による排土処理は、昭和63年度～平成４年度まで実施された中野谷地区遺跡群の発掘調査の経験から導入されたものである。これらの方法については、『大下原遺跡・吉田原遺跡』（安中市教育委員会、1993年）、『中野谷地区遺跡群』（安中市教育委員会、1994年）の中で詳述されているので、その中の記述を参考にされたい。

作業の種類	水田址	溝	土坑・井戸	ピット群 （掘立柱建物址）	竪穴状遺構
基準杭	委託				
グリッド杭	直営				
表土掘削・除去	バックホー				
遺構確認	ジョレン				
遺構精査・掘削	移植ゴテ ねじり鎌（両刃）	移植ゴテ ねじり鎌（両刃）	移植ゴテ ねじり鎌（両刃） 竹箆 中華用お玉	移植ゴテ ねじり鎌（両刃） 竹箆 中華用お玉 芋掘り用突き	移植ゴテ ねじり鎌（両刃） 竹箆
排土処理	排土坑による排土処理を併用				
遺物取り上げ法	グリッド	２ｍ毎に分割	一括	一括	竪穴式住居址に準ずる。
遺構平面図	航空ビデオ利用による平面図作成法				
土層断面図	ビニール転写法	ビニール転写法	ビニール転写法	ビニール転写法	ビニール転写法
遺構断面図	図面起こし	図面起こし	図面起こし	図面起こし	図面起こし
遺構写真	リバーサル写真（35mm） モノクロ写真（35mm）				

第１表　作業工程別調査方法一覧表

（5）調査機材

今回の発掘調査で使用した機材は以下のとおりである。

〔表土掘削〕バックホー（0.7㎥）

〔遺構確認・精査〕ジョレン、ねじり鎌（両刃）、手鍬、移植ゴテ、竹箆、プラスチック製荷札、赤鉛筆、青鉛筆等

〔ピット掘削〕突き（山芋掘り用）、中華用お玉等

〔遺構測量〕レベル、スタッフ、農業用ロールビニール、黒マジック、五寸釘、竹串、コノエダブル、ピンポール（1m）、ポール（2m）等

2　整理の方法

（1）整理の方針と目的

調査の方針と目的についてはすでに述べたとおりであり、初期の方針に沿って遺物整理は行うこととした。今回の調査では、遺跡全体から浅間B軽石（As－B）に覆われた水田跡が検出された。また水田跡以外にそれに関連する施設（水口、溝、畦等）及び竪穴状遺構・掘立柱建物が検出された。整理に当たっては土層の堆積状態・遺構の面的な配列より中宿在家遺跡との関連を捉え、集落の景観を復元することとした。

（2）遺構の記載方法

掘立柱建物址は柱穴の深さや位置関係より個々の建物の形態や規模を推定し図版を作成した。

土坑･溝･竪穴状遺構･井戸については平面図･土層断面図･土層観察表･遺構観察表を掲載した。

（3）遺物の記載方法

[土器の分析・記載方法] 土師器・須恵器の分析・記載方法 土師器、須恵器は小破片が多いため図示できるものが少なく、残存率の高いもので時期的特徴を示すものに限り図示し、その他は点数のみを示した。

[陶磁器類の分析・記載方法] 小破片が多数であるため、残存率の高いものに限り破片実測を基本とした。青磁については全点実測を行った。その他のについては器種と点数を示した。

[その他の遺物の分析・記載方法] 鉄製品、石製品の実測はコピーを利用して行い、実測図と観察表を作成した。古銭は拓本と観察表を記載した。

（深町　真）

Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境

1　地理的環境

中宿在家Ⅱ遺跡は、安中市中宿字石合に所在する。本遺跡の所在する安中市は、群馬県西部に位置し、古代より関東と長野を結ぶ交通の要路としてその任を果たしてきた地である。

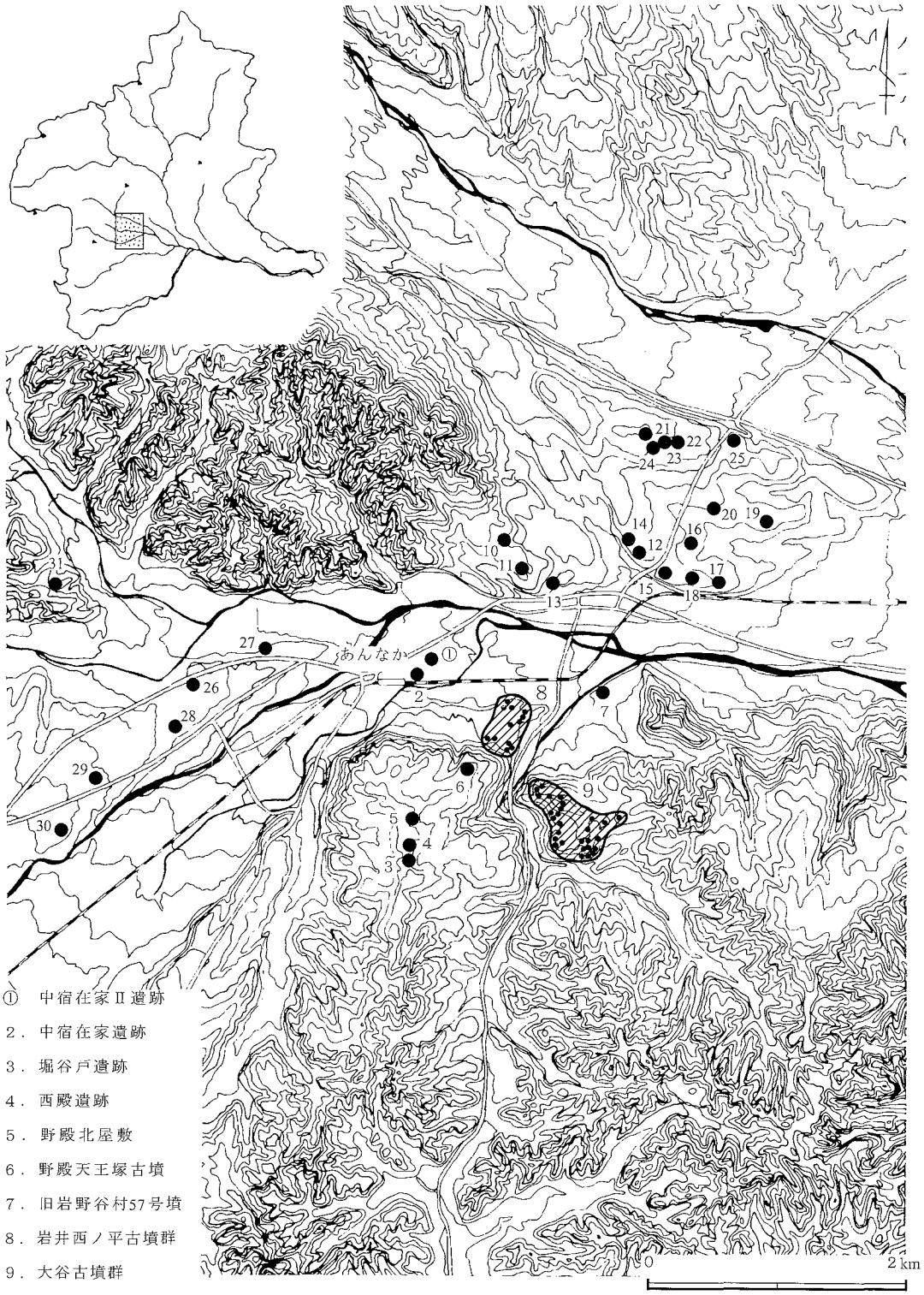
市の東南端から上間仁田の天神川までは岩野谷丘陵が続き、いずれもその地域の分水嶺となっている。市域の中央よりやや南側を碓氷川、やや北側を九十九川が東流し、中宿地内で合流し、さらに東に向かって流下している。この河川の両岸では河岸段丘が発達している。碓氷川沿岸では、中野谷から天神川までが上位段丘面、安中・原市が中位段丘面、磯部が下位段丘面に位置している。碓氷川下位段丘面を柳瀬川が東流し、大竹字池田で碓氷川上位段丘を浸食する猫沢川が合流し、中宿で天神川が合流する。この天神川は碓氷川上位段丘と岩野谷丘陵の境界を流れていて、その左側は碓氷川上位段丘、東側は岩野谷丘陵がある。さらに柳瀬川は旧国道18号の鷹之巣橋西詰付近で碓氷川に合流している。

このように中宿の大部分は碓氷川下位段丘より一段低い碓氷川低地帯に立地しており碓氷川に九十九川や柳瀬川が合流する地点でもある。中宿在家Ⅱ遺跡はこの碓氷川低地帯に位置し、自然堤防上に立地している。また、碓氷川と柳瀬川の合流地点から碓氷川沿いに碓氷川が中宿側で瀬になっているところまで段差があり碓氷川及び柳瀬川の洪水による河岸段丘であると推定される。柳瀬川の両岸にも段差が見られ、柳瀬川の洪水による河岸段丘であると推定される。

2　歴史的環境

本遺跡の周辺遺跡について概観する。弥生時代に遡る遺跡は、隣接する中宿在家遺跡（2）で後期（樽式）の遺物が出土しており、付近に集落遺跡の存在が推定される。また、この遺跡では As－B 軽石層下の水田址と中世館址が検出されている。奈良・平安時代の集落遺跡としては本遺跡の南、岩野谷丘陵上に西殿遺跡（4）、堀谷戸遺跡（3）が存在する。中世館址としては古城遺跡（10）、板鼻城址（11）、舘谷津館址（32）が存在している。

この地域は碓氷川・柳瀬川の氾濫と、交通の要衝としての人為的な影響を受け、絶えず変化をくりかえしてきた。中宿在家遺跡の水田面では砂礫層が確認され大小の洪水あるいは増水があった可能性が大きいこともそのことを裏付けている。また、周辺には東山道、宮街道のルートが推定され、栄朝建立の蓮華寺があるなど歴史的にも重要な意味をもつ地である。



① 中宿在家Ⅱ遺跡

2．中宿在家遺跡

3．堀谷戸遺跡

4．西殿遺跡

5．野殿北屋敷

6．野殿天王塚古墳

7．旧岩野谷村57号墳

8．岩井西ノ平古墳群

9．大谷古墳群

10．古城遺跡

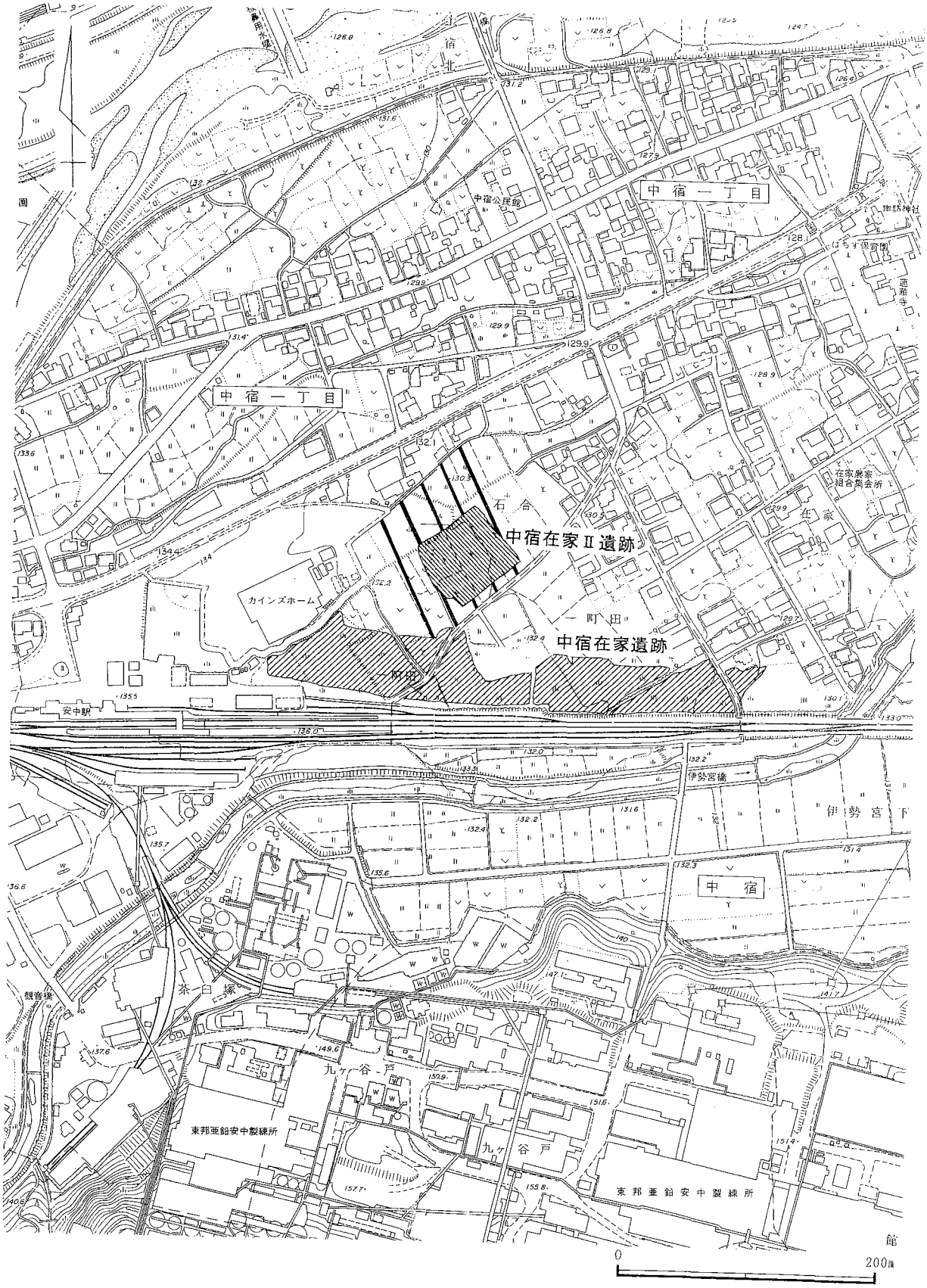
第1図　遺跡位置図

	遺跡名	旧	縄文						弥生		古墳				奈良	平安	中世	近世
			草	早	前	中	後	晩	中	後	前	中	後	終				
①	中宿在家Ⅱ遺跡															○	◎	
2	中宿在家遺跡															○	◎	○
3	堀谷戸遺跡				※		※						○	○	◎	◎	△	
4	西殿遺跡				※										○	○		
5	野殿北屋敷																○	△
6	野殿天王塚古墳												◎					
7	綜覧岩野谷村57号墳												◎					
8	岩井西ノ平古墳群												◎					
9	大谷古墳群												◎					
10	古城遺跡	◎			△											○	◎	
11	板鼻城遺跡				○												◎	
12	立的塚（荒木山）											◎						
13	綜覧板鼻町4号墳												◎?					
14	屏風岩遺跡													◎		△		
15	平塚古墳											◎						
16	観音塚古墳												◎					
17	八幡二子塚古墳												◎					
18	八幡遺跡				※	※	※			◎	◎	○	◎	○	◎	◎		
19	七五三引遺跡												◎					
20	八幡中原遺跡	※					△			※			◎	○	◎	◎		
21	若田原遺跡				○	◎	◎											
22	若田大塚古墳											◎						
23	楢ノ木塚古墳												◎					
24	峯林古墳													◎				
25	長瀞西古墳											◎						
26	安中城跡																◎	◎
27	安中内出																◎	
28	稲荷神社古墳												◎					
29	愛宕神社古墳												◎?					
30	綜覧安中町6号墳												◎					
31	雌雄塚古墳													◎				

◎　住居5軒以上・古墳・記念物　　○　住居5軒以下・大溝・水田・畑など

△　遺構有り（土坑・溝など）　　※　遺物のみ

第2表　中宿在家Ⅱ遺跡周辺遺跡



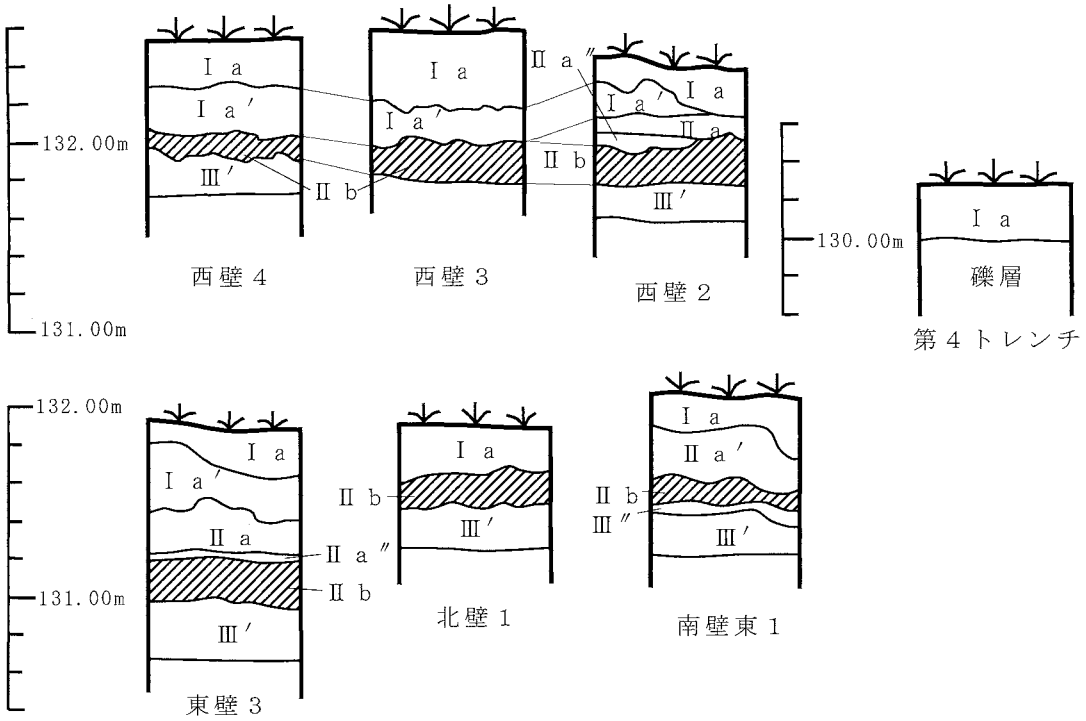
第２図　中宿在家Ⅱ遺跡位置図

3　層序

中宿在家Ⅱ遺跡における基本層序は第３図のとおりである。土層の堆積は概ね基本層序に準じているが、遺跡が低地に立地し、洪水等の影響により、台地とはやや土層の堆積状況が異なっている。水田址はⅡｂ層に覆われており、この水田耕作土はⅢ層に対比され、水田土壌特有の鉄分の沈着が認められる。また、分析ではⅡａ層中から浅間粕川テフラ（As－Kk）が検出された。本遺跡北側で一段低くなった場所では、洪水層の下が礫層となることを確認した。

	層名	色調	しまり	粘性	混入物			備考
					As－A	As－B	粕川テフラ	
Ia層	黒褐色土層		△	△	○			
Ia'層	灰白色軽石層	Ⅰａ＜Ⅰｂ	×	×	◎			一部洪水層
Ⅱa層	黒色土層	Ⅰｂ＞Ⅱａ	△	△		○	※	
Ⅱa'層								
Ⅱa"層								
Ⅱb層	灰褐色軽石層	Ⅱａ＜Ⅱｂ	×	×		◎		As－B純層
Ⅲ'層	暗赤灰色土層	Ⅱｃ＜Ⅱｂ	◎	○				水田耕作土

第３表　基本層序土層説明



第３図　基本層序柱状図

Ⅳ　平安時代の遺構

本遺跡からは調査区全体からAs－B層（浅間Bテフラ、Ⅱb層）直下の水田址と畦畔、水口及び水路状遺構、溝３条を検出した。

１　As－B層直下水田址

水田址は西から東へ傾斜する地形に沿って調査区全体で検出された。As－B層（浅間Bテフラ、Ⅱb層）に覆われており、畦畔等の遺存状況は良好であった。調査区中央部で南北に延びる大畦畔とこれに併設する溝（M－１号溝）を検出した。また、大畦畔にある堰状の集石をもつ中央水路、この水路に繋がる東西に延びる溝（M－２号溝、M－９号溝）を検出した。

隣接する中宿在家遺跡でも同様な水田跡と関連施設が確認されている。これにより本地域の水田が東西南北の大畦畔によって大きく区画され、その中を大小様々な水田が不規則に区画されていることが判明した。また、水路等の水の供給や畦畔の水口も傾斜地形に沿って構築されており、水田耕作における水の管理技術が高いことが、本遺跡においても確認された。

この水田は土層堆積状況からAs－B層の堆積後に放棄され、その後、度重なる洪水によって、本格的な耕作は近世まで行われなかったことが判明した。

２　溝

水田址に伴う溝は３条検出された。水田に水を供給する目的をもった水路の機能を備えていたと推定される。このうちM－１号溝とM－９号溝は隣接する中宿在家遺跡から延びる溝と同一である可能性が高い。

[M－１号溝]（第5図）

遺跡全体を縦断する溝で、等高線から南から北に水が流れていたと推測される。溝の西側の土手は比較的広く、その上には石が点在していた。東側の土手は西側に比べると幅が狭く、また高さも低い。水田址のところで記したようにM－１号溝の東西の土手は水田の畦畔をかねている。M－１号溝の西側の土手（畦畔）には水口がみられないが、東側の土手（畦畔）は３ヶ所で切られ水口が形成されており、直接水田とつながっている。このほかに直接M－１号溝と水田はつながらないが、M－１号溝東側の土手（畦畔）沿いに４ヶ所の水口が造られている。また、G－11グリッドでM－１号溝は西側のM－９号溝と合流し、また、東側では、M

－２号溝が分岐している。この部分のＭ－１号溝は他の部分より幅が広がり池状となっており、大小さまざまな礫が存在したが、このうち大きなものは置かれたものと推測され、水量調整施設であると推測される。

[Ｍ－2号溝]（第５図）

Ｍ－１号溝とＭ－９号溝が合流するところの東から遺跡の東端に延びる溝で、地形的に西から東に水が流れていたと推定される。一箇所畦畔を切って延びているが、その切り方から畦畔を壊しているのではなく、水田への給排水のためと推定される。Ｍ－２号溝はＭ－１号溝の東北側への水田の給排水の役割を果たしていたと推測される。

[Ｍ－9号溝]（第５図）

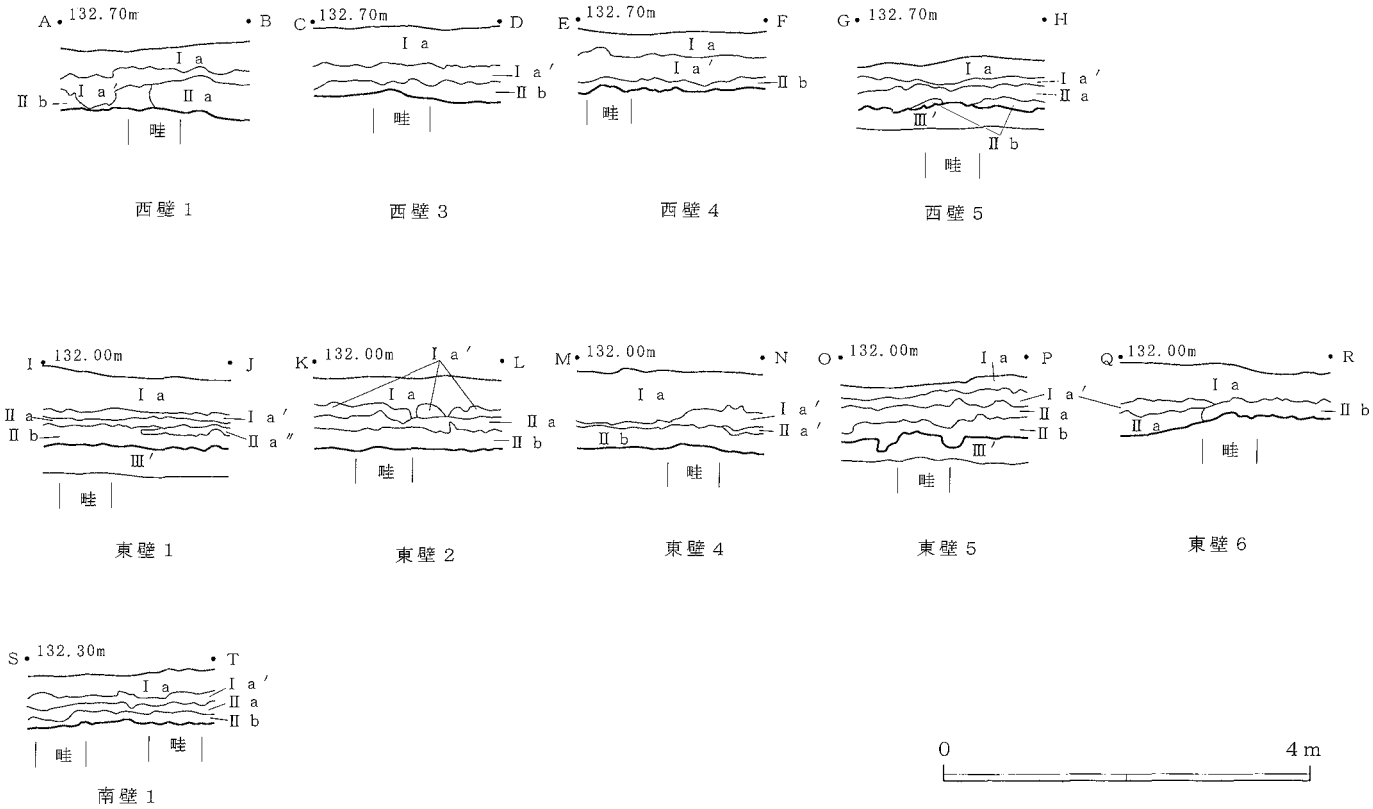
遺跡の西壁から斜めに延びてＭ－１号溝に合流する溝で、Ｍ－８号溝や１号井戸によって一部を壊されている。地形的に西から東に水が流れていたと推定される。３箇所で畦畔を切って延びているが、Ｍ－２号溝と同様にその切り方から畦畔を壊しているのではなく、水田への給排水のためと推測される。Ｍ－９号溝はＭ－１号溝の西側の水田への給排水の役割を果たしていたと推定される。

（深町　真・井上慎也）

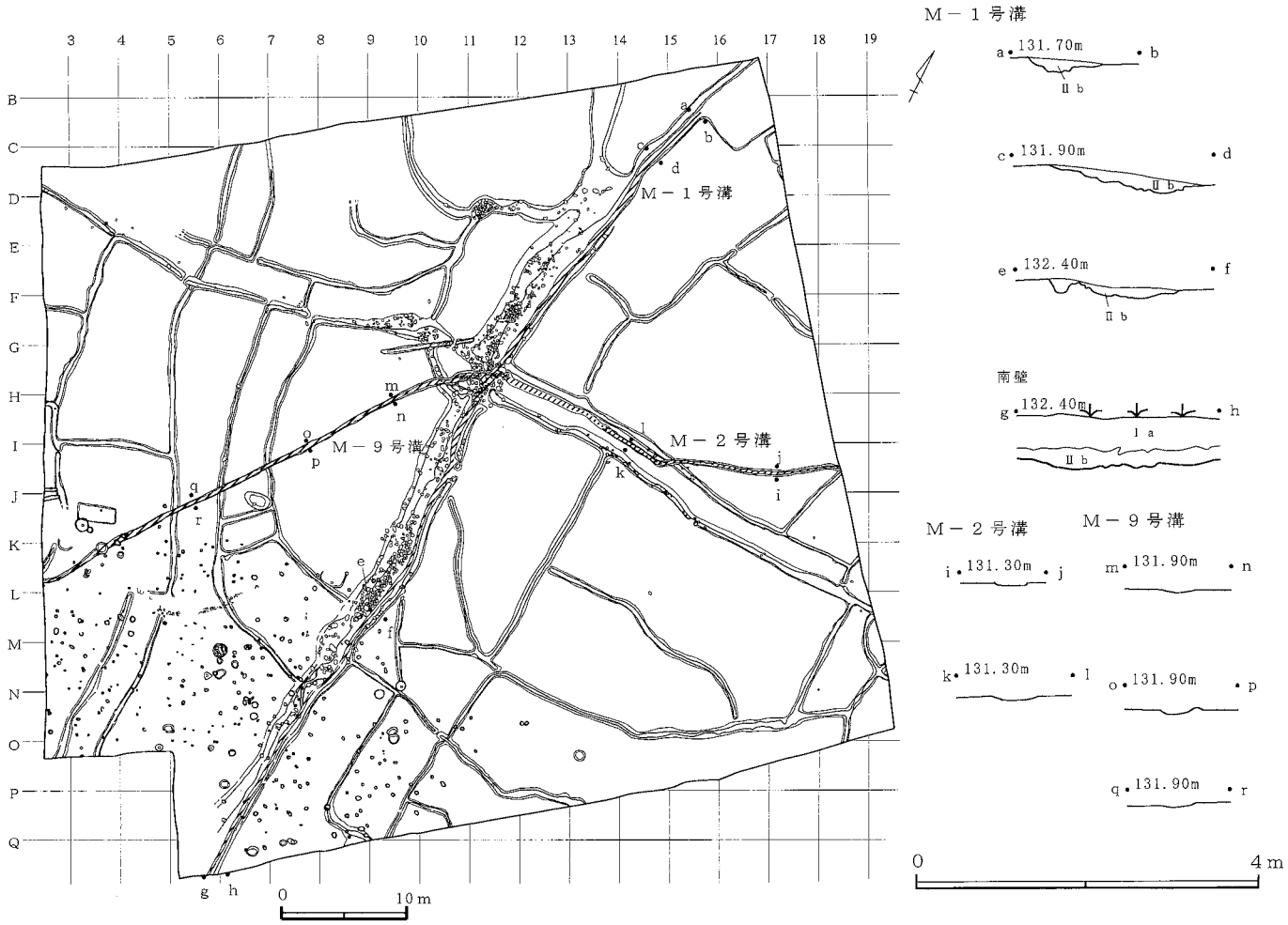
（単位：m）

遺構名	上幅	下幅	深さ	備考
Ｍ－１号溝	1.84	1.2	0.16	水路
Ｍ－２号溝	0.56	0.32	0.08	水路
Ｍ－９号溝	0.44	0.24	0.08	水路

第４表　平安時代の溝観察表



第４図　西壁・東壁・南壁土層断面図



第5図　As－B層直下水田址全体

V　中世の遺構

中世では、調査区南西部で館址に係わる遺構群が検出された。調査では館址の東側部分のほぼ2/３を検出した。館址には区画する大溝（堀）等は検出されなかった。本遺跡で検出された遺構は中宿在家遺跡で検出された館址と構造が類似する。検出した遺構は掘立柱建物址９棟、竪穴状遺構１基、柵柱列１条、井戸１基、土坑19基、ピット群である。

1　掘立柱建物址

[HT－1号掘立建柱建物址]（第７図）

東西２間以上に南北２間で四周に庇を巡らせている建物であると推定される。建物の西側は調査区外に延びている。建物の規模と構造及び配列からHT－２号掘立柱建物址とともに、中宿在家Ⅱ遺跡の掘立柱建物址群の主屋であったとみられる。ただし、内側の柱穴は外側の柱穴より総じて浅いので１棟ではなく２棟の可能性もある。この場合、外側の建物は寺の講堂的な建築物であったと考えられる。

[HT－2号掘立建柱建物址]（第８図）

東西２間に南北２間の総柱の建物で、総じて内側の柱穴が外側の柱穴より深い柱穴で構成され、また、四隅の柱穴が対角線上に並んでいるので、四周に庇を巡らせた建物（２間４面）であると考えられる。南側中央に張り出し部がつき、出入り口であると考えられる。建物の規模と構造及び配列からHT－１号掘立柱建物址とともに、中宿在家Ⅱ遺跡の掘立柱建物址群の主屋的建物であったとみられる。

[HT－3号掘立建柱建物址]（第９図）

東西１間に南北３間の建物であると推定される。建物の規模から主屋に付随する建造物であったと考えられる。

[HT－4号掘立建柱建物址]（第９図）

東西２間に南北２間の建物である。HT－６号掘立柱建物址と重複する。建物の規模から主屋に付随する建造物であったと考えられる。

[HT－5号掘立建柱建物址]（第10図）

東西４間に、南北２間の建物である。棟方向は東西軸である。HT －６号掘立柱建物址と重複する。細長い建物であるので、倉庫的建物であると考えられる。

[HT－6号掘立建柱建物址]（第11図）

南北６間に東西２間の建物である。また、建物の西側及び南側に柵列があったあるいは塀があったと推定される。棟方向は南北軸である。HT－４号掘立柱建物址及びHT－５号掘立柱建物址と重複する。南北に細長い建物であるので、倉庫的建物であると考えられる。

[HT－7号掘立建柱建物址]（第12図）

東西３間に南北１間の建物で、東側に庇がつくと推定される。棟方向は東西軸である。細長い建物であるので、倉庫的建物であると考えられる。

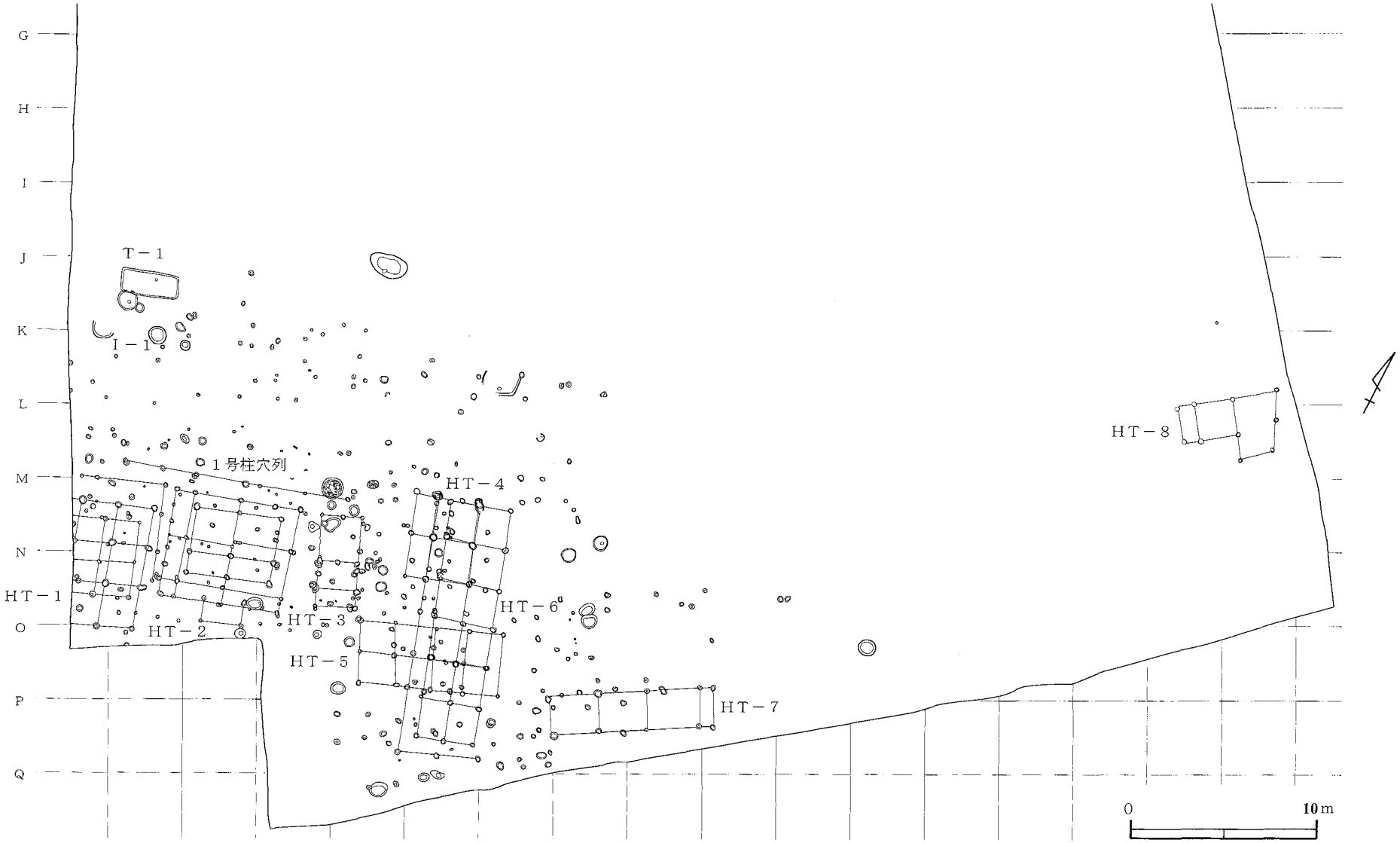
[HT－8号立掘立建柱建物址]（第12図）

東西１間に南北１間で西側に庇のつく建物の東に、東西１間に南北２間の台形の平面建物がつくという曲がり屋的な平面を持つ建物である。棟方向は東西軸である。

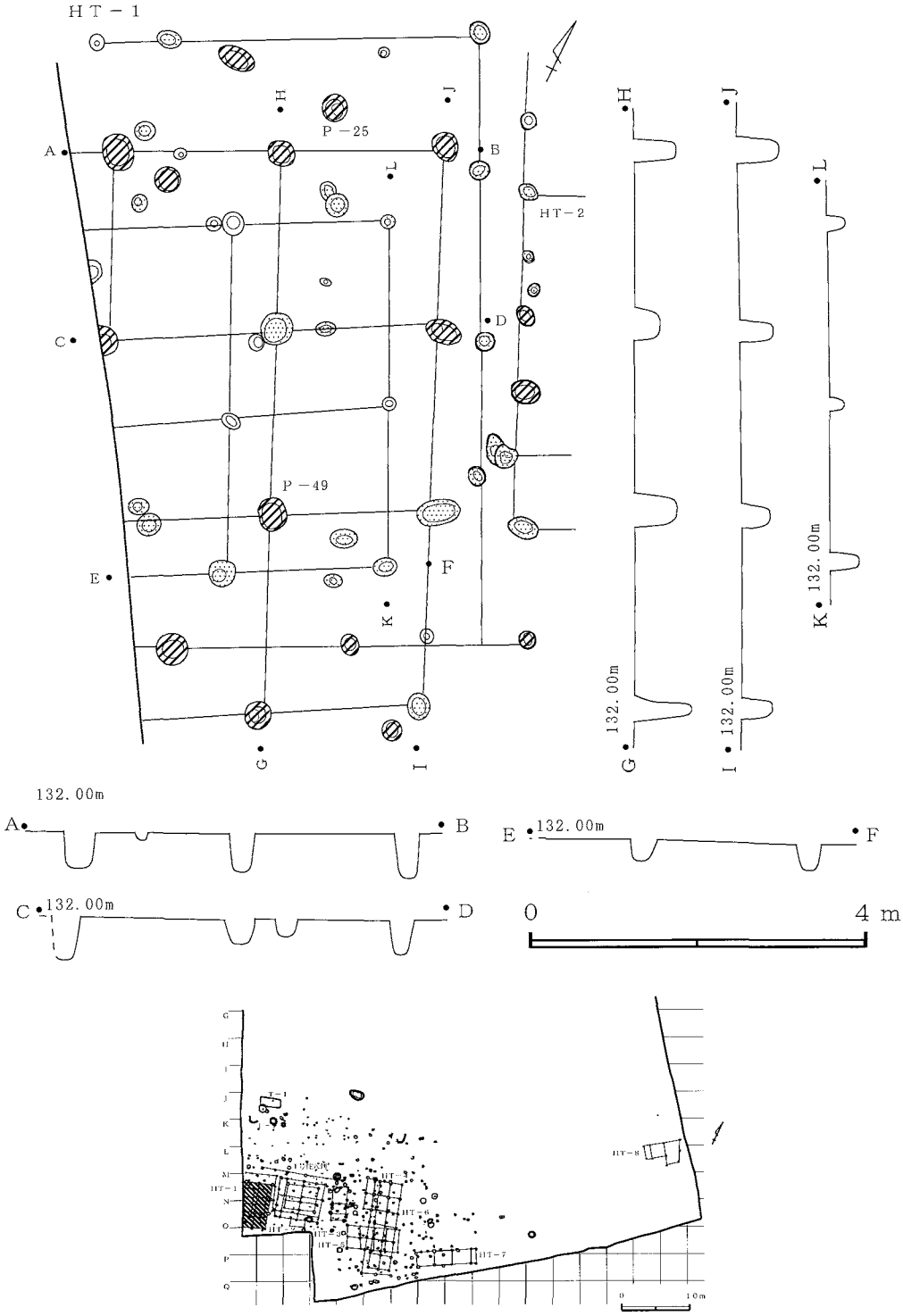
（単位：m）

遺構名	東西×南北（間）	東西（芯芯）	南北（芯芯）	南北軸方向 N→E（°）	重複関係	備考
HT－1	（2）×2	(3.92)	6.56	335		主屋・庇付き
HT－2	2×2	6.72	5.76	345		主屋・庇付き
HT－3	1×2	2.16	4.96	337		南庇付き
HT－4	1×2	3.36	4.32	343	HT－6	西庇付き
HT－5	4×2	7.44	3.36	338	HT－6	総柱・庇無し
HT－6	2×6	3.04	12.80	341	HT－4・5	総柱・庇無し
HT－7	3×1	2.16	8.64	332		総柱・庇付き
HT－8	2×1	5.44	3.28	325		西庇付き

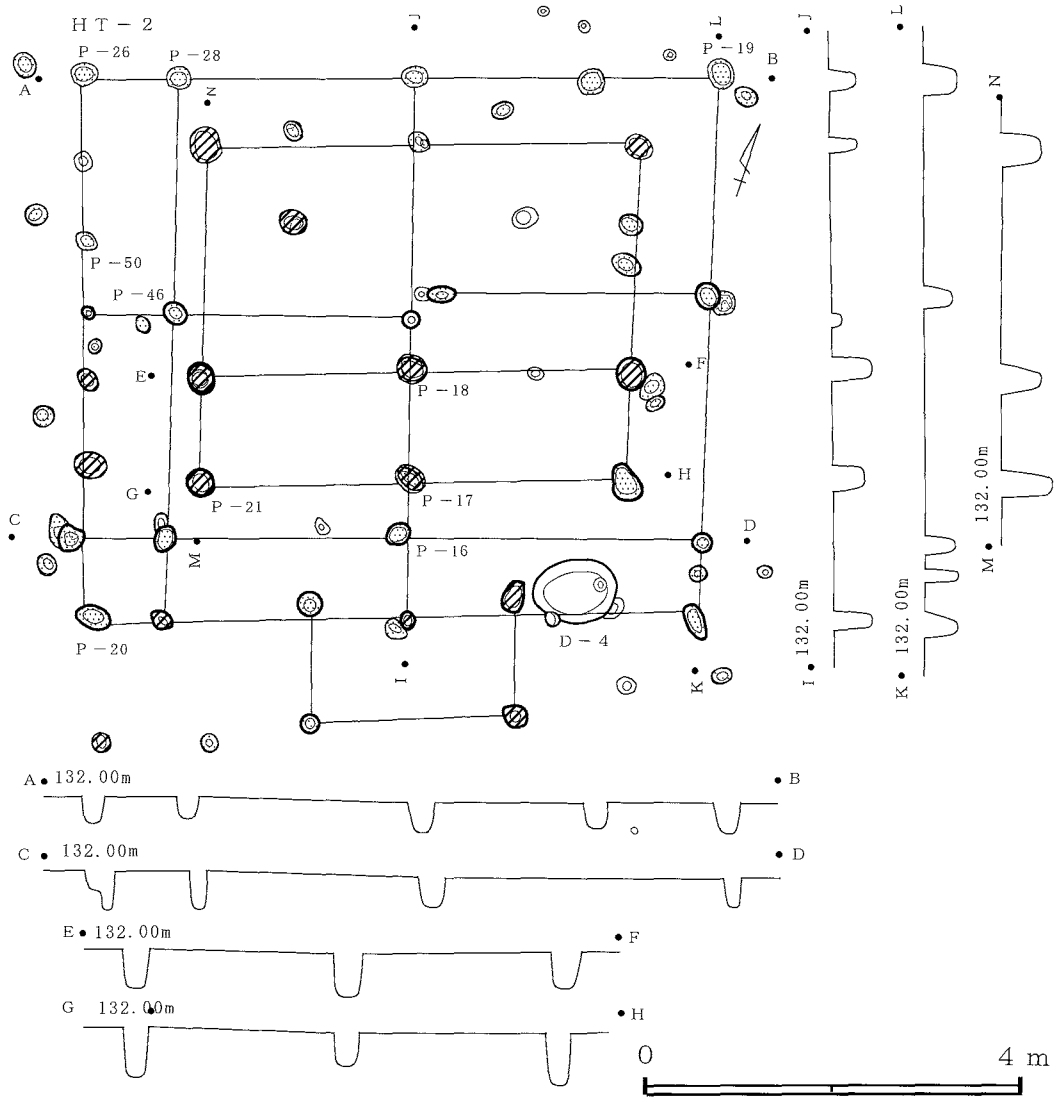
第５表　掘立柱建物址観察表



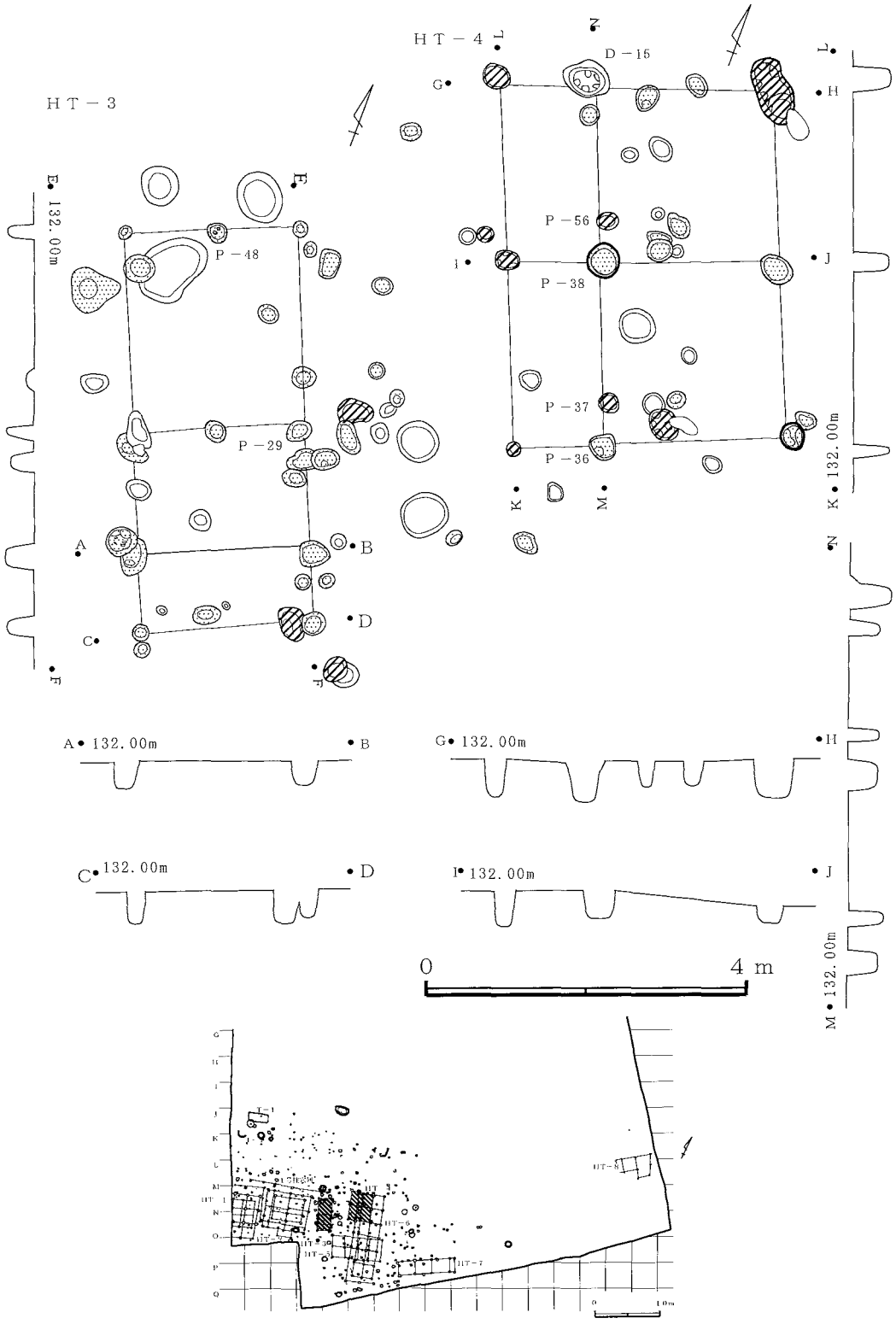
第6図　掘立柱建物址配置図



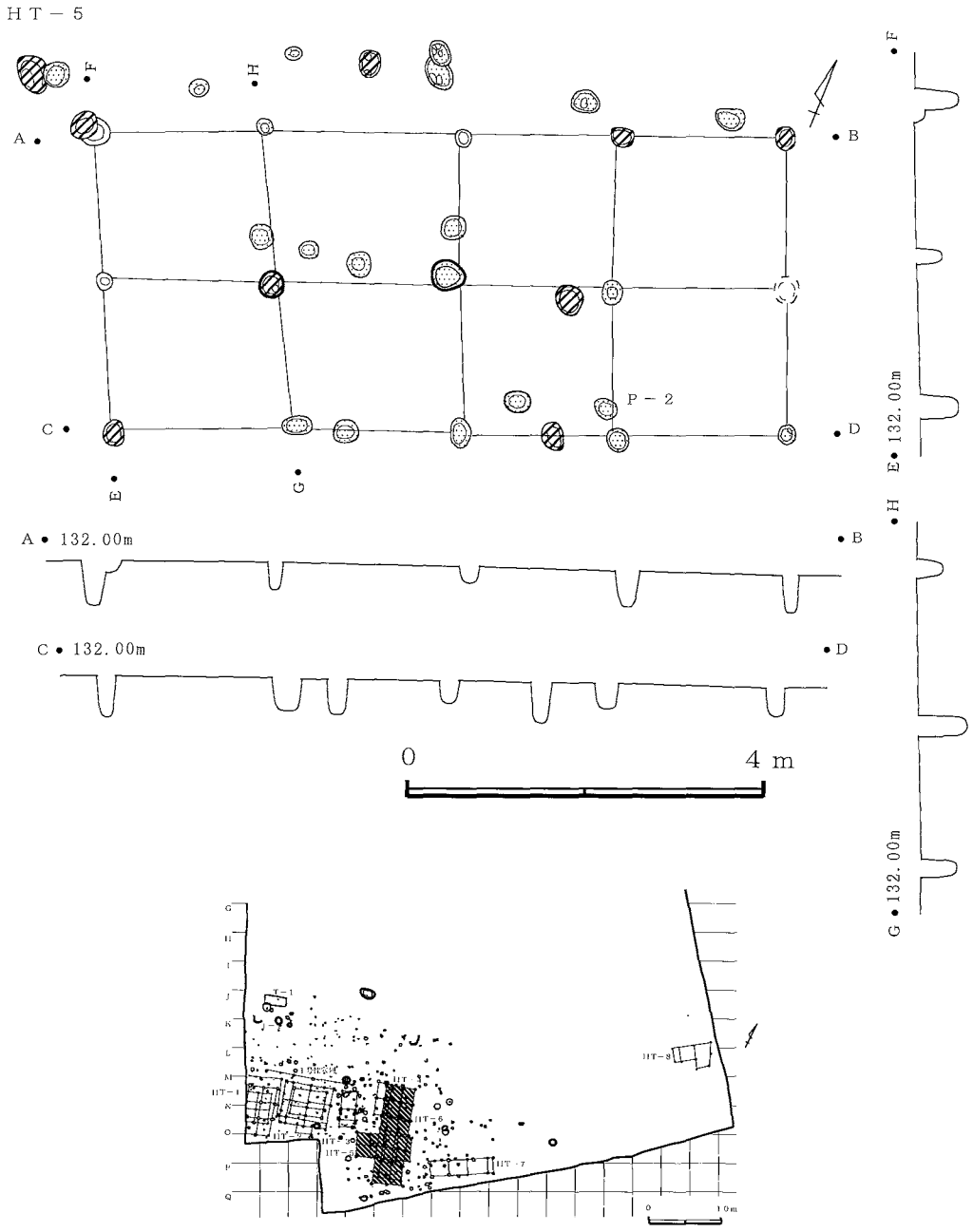
第７図　HT－１号掘立柱建物址実測図



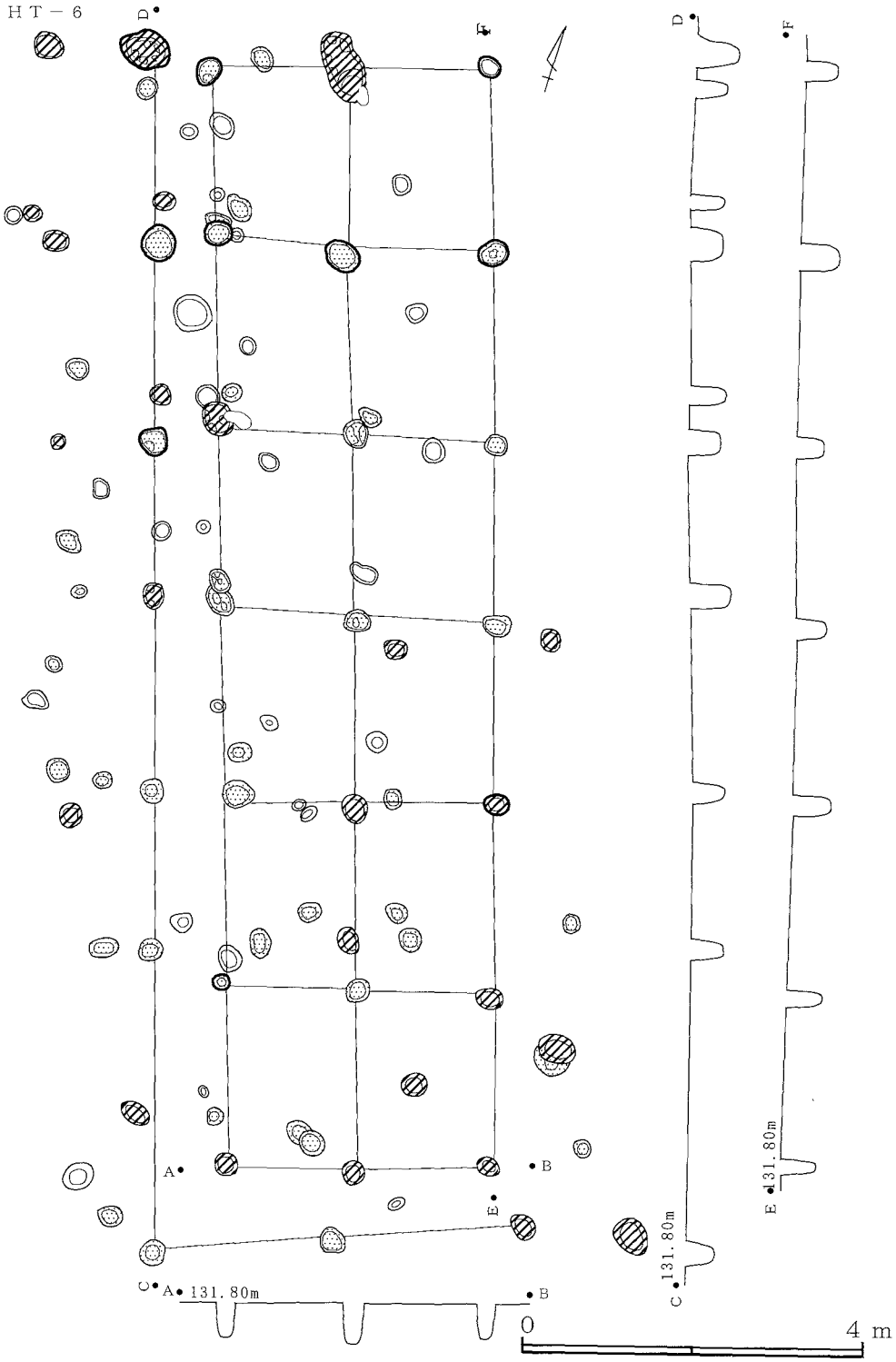
第８図　HT－２号掘立柱建物址実測図



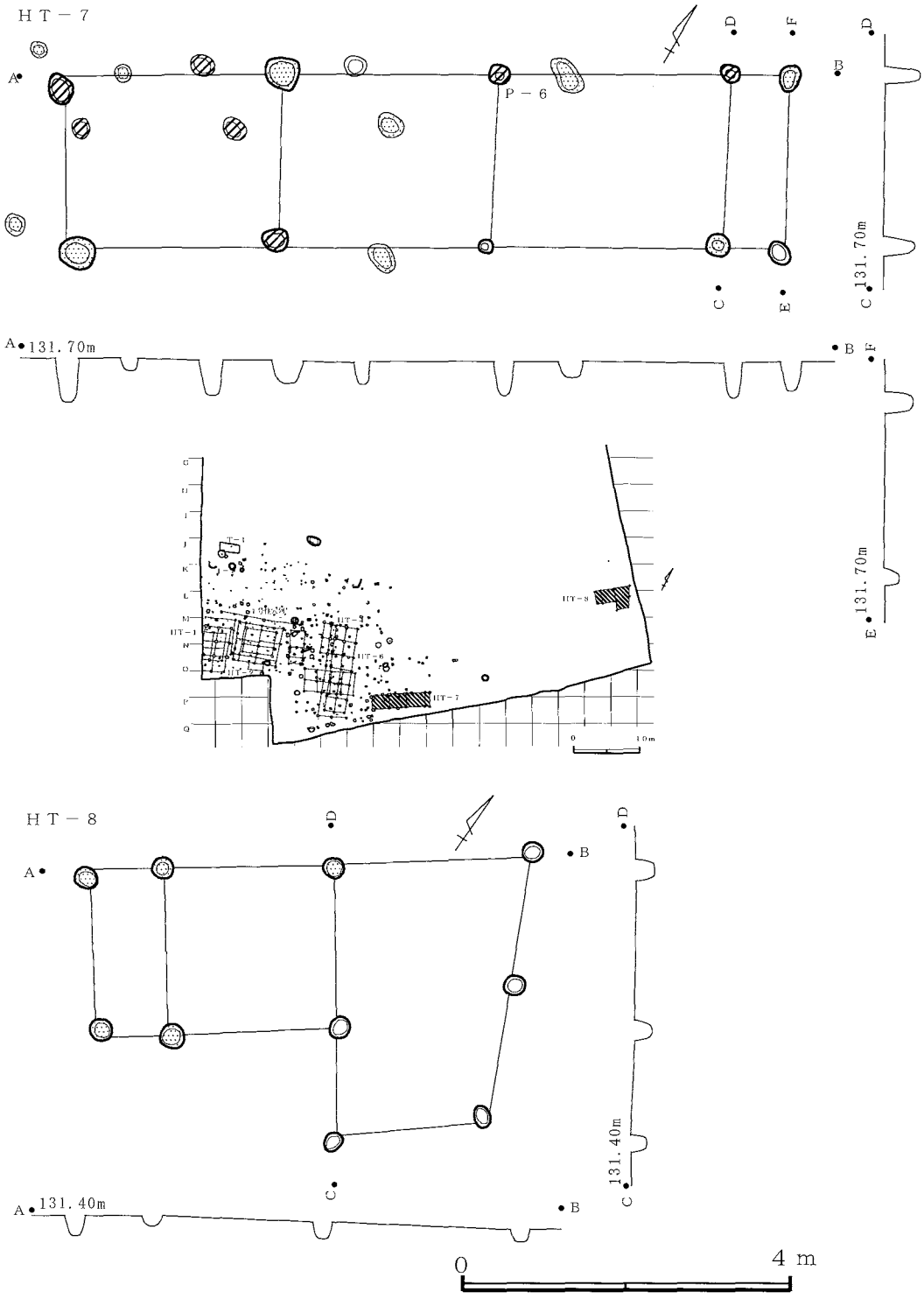
第９図　HT－３・４号掘立柱建物址実測図



第10図　HT－5号掘立柱建物址実測図



第11図　HT－6号掘立柱建物址実測図



第12図　HT－7・8号掘立柱建物址実測図

2　柱穴列

[1号柱穴列]（第13図）

HT－1号～HT－3号掘立柱建物址の北側に、柵柱穴列と推測される東西に並ぶピット群を1条検出した。位置と走方向から判断して、敷地を区切る「垣戸」の一部であると考えられる。

3　竪穴状遺構

[T－1号竪穴状遺構]（第14図）

掘立柱建物群から北へ約10m離れた位置で検出した。形態は平面長方形である。ピット等及び遺物は検出されなかった。

4　井戸

[I－1号井戸]（第14図）

I－1号井戸は、T－1号竪穴状遺構の南東に位置し、M－9号溝の一部を壊して造られている。井戸は洪水によって埋没しており、底部には礫が混入している。埋土には浅間Bテフラが混入する。底部礫層付近で水が湧き出る。15～16世紀の青磁を含む陶磁器類が出土した。

（単位：m）

遺構名	平面規模		深さ	面積	平面形態	主軸方向	出土遺物			備考
	南北	東西				N→E（°）	陶器	磁器	礫	
T－1号竪穴状遺構	3.24	1.37	0.32	4.45	長方形	255				
I－1号井戸	0.99	0.97	1.09					○		15～16世紀

第6表　竪穴状遺構・井戸観察表

5　土坑

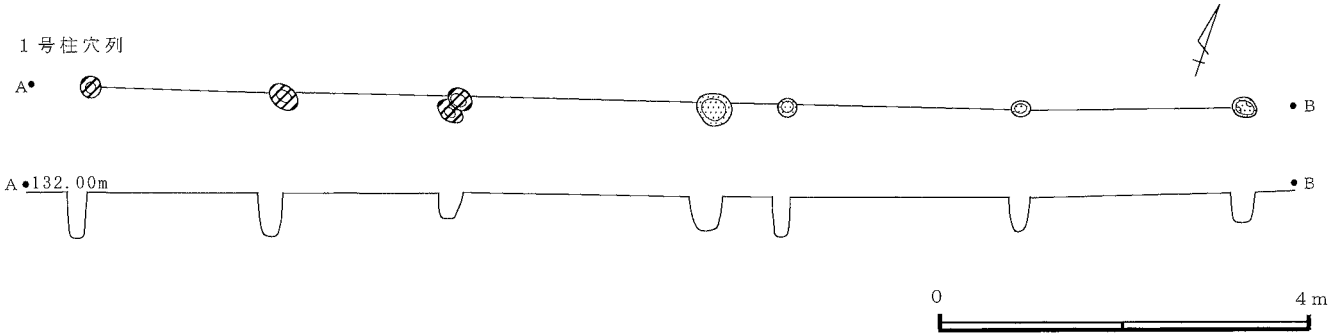
土坑は調査区南西部に分布する。土坑の種類は掘立柱建物の柱穴であるもの（D－12号土坑・D－15号土坑）、集石を伴うもの（D－20号土坑）、遺物が出土したもの（D－1号土坑）、炭化材が出土したもの（D－22号土坑）、その他性格不明のものに分けられる。また、D－18号土

坑はＭ－７号溝、Ｄ－21号土坑はＭ－８号溝、Ｄ－23号土坑はＴ－１号竪穴状遺構によってそれぞれ壊されている。これらの土坑は検出状況及び埋土からほとんどのものが中世に属すると考えられる。

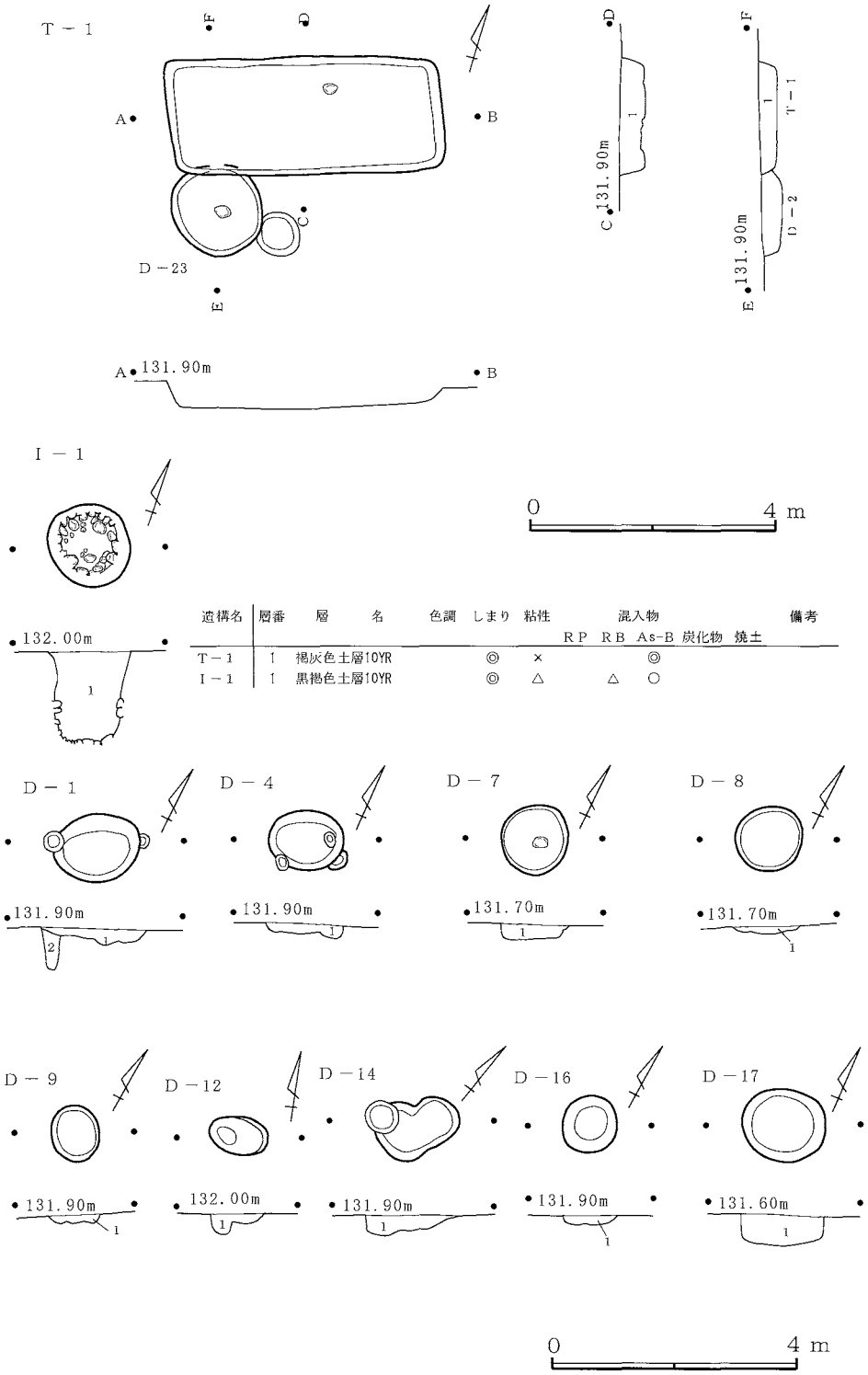
（単位：m）

遺構名	平面規模		深さ	形　態		出土遺物			備考
	南北	東西		平面	断面	陶器	磁器	礫	
Ｄ－１号土坑	1.22	0.80	0.22	楕円形	皿状		○		12末～13世紀
Ｄ－４号土坑	0.88	0.72	0.18	楕円形	皿状				
Ｄ－７号土坑	0.83	0.79	0.19	円形	皿状			○	
Ｄ－８号土坑	0.81	0.76	0.11	円形	皿状				
Ｄ－９号土坑	0.65	0.59	0.12	円形	皿状				
Ｄ－12号土坑	0.72	0.45	0.24	楕円形	皿状				
Ｄ－14号土坑	1.10	0.61	0.23	ハート形	椀状			○	
Ｄ－16号土坑	0.67	0.63	0.13	円形	皿状				
Ｄ－17号土坑	0.99	0.86	0.38	楕円形	椀状				
Ｄ－18号土坑	1.94	0.13	0.22	隅丸方形	皿状			○	
Ｄ－19号土坑	1.56	1.04	0.23	楕円形	椀状			○	
Ｄ－20号土坑	1.22	1.22	0.45	円形	椀状			○	旧Ｓ－１
Ｄ－21号土坑	1.11	0.63	0.16	楕円形	皿状			○	旧Ｓ－２
Ｄ－22号土坑	2.12	1.22	0.12	楕円形	皿状	○		○	旧Ｓ－３
Ｄ－23号土坑	1.49	1.60	0.34	楕円形	皿状			○	

第７表　土坑観察表

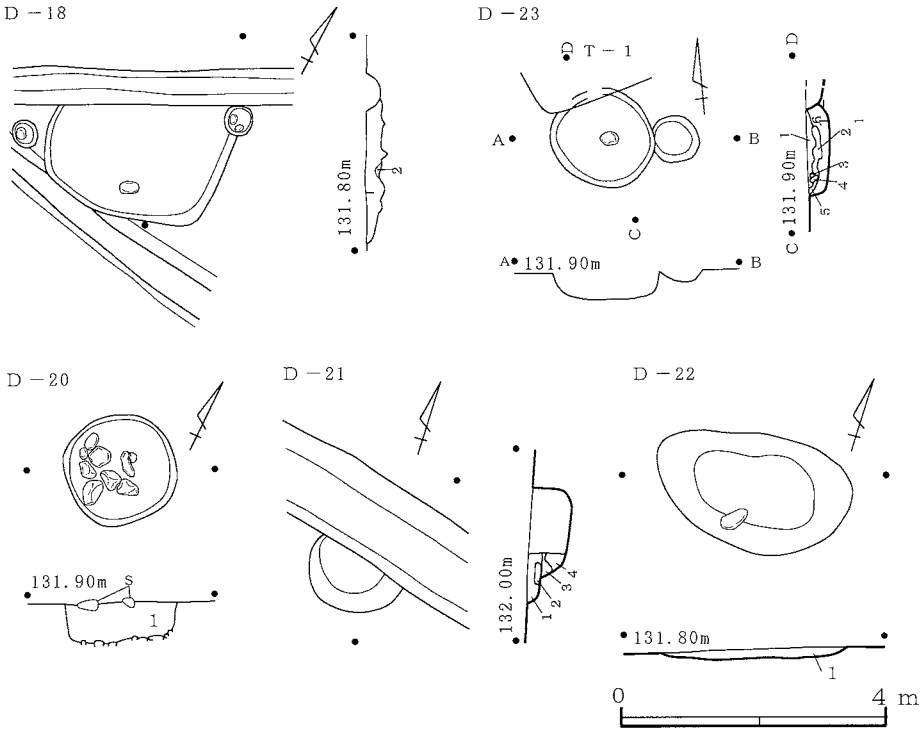


第13図　1号柱穴列実測図



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	As-B	炭化物	焼土	備考
T－1	1	褐灰色土層10YR		◎	×			◎			
I－1	1	黒褐色土層10YR		◎	△		△	○			

第14図　T－1号竪穴状遺構・I－1号井戸・土坑実測図（1）



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	As-B	炭化物	焼土	備考
D－1	1	褐灰色土層10YR		◎	△		△	○			
	2	暗褐色土層５YR	1＞2	◎	○						ピット
D－4	1	褐灰色土層10YR		◎	△		△	○			
D－7	1	褐灰色土層10YR		◎	△			○			
D－8	1	褐灰色土層10YR		◎	△			○			
D－9	1	褐灰色土層10YR		◎	△		○	○			
D－12	1	褐灰色土層10YR		◎	△		△	○	※		
D－14	1	黒褐色土層10YR		◎	△		△	○	※		
D－16	1	褐灰色土層10YR		○	△			○			
D－17	1	褐灰色土層10YR		○	△			○			
D－18	1	褐灰色土層10YR		○	×			○			
	2	褐色土層10YR	1＞2	◎	○			※			
D－20	1	褐灰色土層10YR		◎	△		△	○	※	※	
D－21	1	褐灰色土層10YR		◎	△			○			
	2	灰黄褐色土層10YR	1＞2	◎	○			△			
	3	褐灰色土層10YR	1＞3	◎	△			○			
	4	灰黄褐色土層10YR		◎	△			○			
D－22	1	黒褐色土層10YR		◎	△			○			
D－23	1	黒褐色土層10YR		○	△			○			
	2	褐色土層10YR	1＜2	○	△			※			
	3	鈍い黄褐色土層10YR	2＜3	◎	△			※			
	4	明黄褐色土層10YR	3＜4	◎	○						
	5	黒褐色土層５YR	4＞5	○	○			※			
	6	黒褐色土層10YR	5＞6	◎	△			○			

第15図　土坑実測図（２）

Ⅵ　近世の遺構

1　溝

調査区南西部付近で、水田址の畦畔や溝（水路）及び中世遺構群を壊して造られた小規模な溝を６条検出した。いずれも遺構の切り合い関係と埋土から近世に属すると考えられる。

畦畔→Ｍ－３号溝

畦畔→Ｍ－４号溝

畦畔→Ｍ－５号溝・Ｍ－６号溝→Ｍ－８号溝

畦畔→Ｄ－18号土坑→Ｍ－７号溝→Ｍ－８号溝

Ｄ－21号土坑→Ｍ－８号溝

[Ｍ－３号溝～Ｍ－７号溝]（第16図）

Ｍ－３号溝～Ｍ－７号溝は互いに平行に延びており、水田址の畦畔を壊して造られている。また、Ｍ－７号溝はＤ－18号土坑を壊しており、Ｍ－３号溝・Ｍ－４号溝・Ｍ－７号溝はピットによって壊されている。一方、Ｍ－５号溝～Ｍ－７号溝はＭ－８号溝によって壊されている。走方向と深さからＭ－３号溝～Ｍ－７号溝は同時期に掘られたものと推測される。

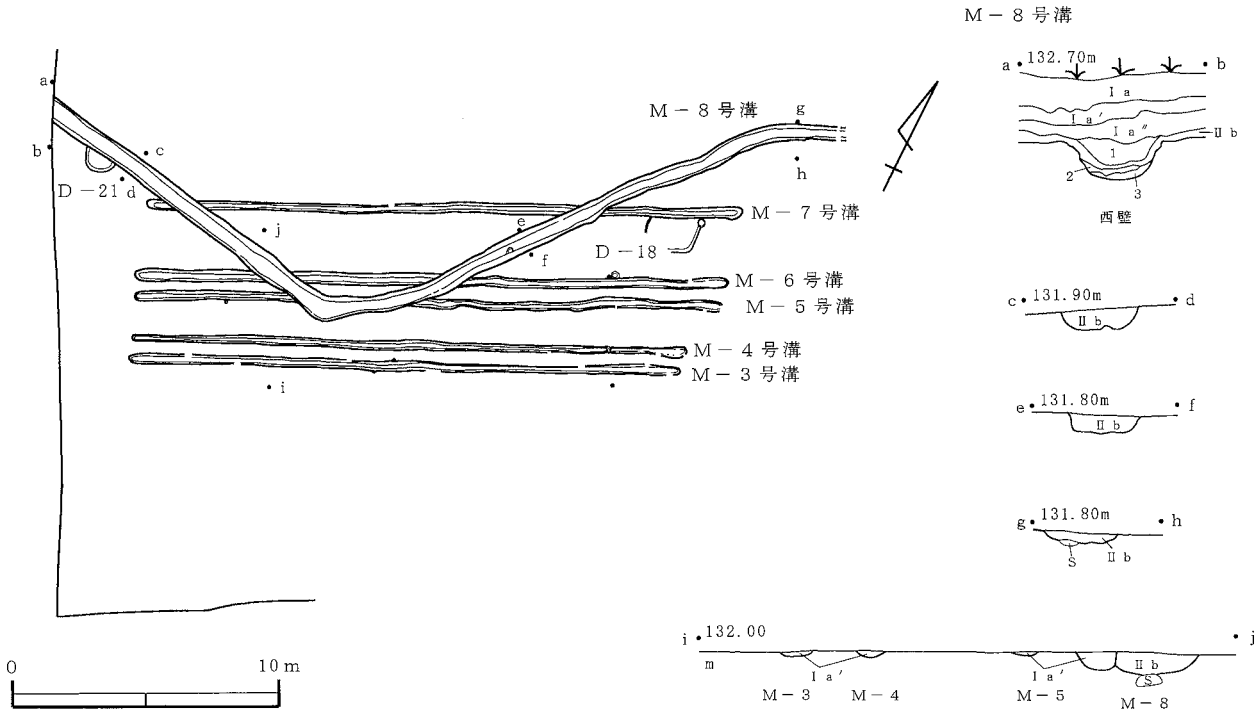
[Ｍ－８号溝]（第16図）

Ｍ－８号溝は畦畔・Ｄ－21号土坑・Ｍ－５号溝・Ｍ－６号溝・Ｍ－７号溝・Ｍ－９号溝及びピットを壊して造られている。底面の一部に礫が分布する場所も認められた。土層の堆積状態から水路だったと推測される。

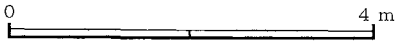
（単位：m）

遺構名	上幅	下幅	深さ	備考
Ｍ－３号溝	0.48	0.24	0.10	耕作溝
Ｍ－４号溝	0.40	0.24	0.11	耕作溝
Ｍ－５号溝	0.48	0.24	0.24	耕作溝
Ｍ－６号溝	0.56	0.24	0.17	耕作溝
Ｍ－７号溝	0.40	0.20	0.15	耕作溝
Ｍ－８号溝	0.96	0.72	0.20	水路

第８表　近世の溝観察表



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	As-B	炭化物	焼土
M－8	1	橙色土層10YR		◎	△			※		
	2	暗赤灰色土層	1＞2	○	◎					
	3	オリーブ褐色土層	2＜3	◎	◎					



第16図　M－3～8号溝実測図

Ⅶ　遺物

1　中世の遺物

中宿在家Ⅱ遺跡では、水田址から土師器、須恵器や礫が、館址付近から中世陶磁器等の遺物が出土した。遺物は遺構に伴うものは少なく、水田址のものは流れ込みによるものである。中世は一部土坑やピットからの出土もみられるが、多数は中世確認面（包含層）での出土である。

水田址出土の遺物は小破片で摩耗したものが多く、器種と帰属時期の判断ができないため、ここでは点数のみを示す。土師器（形態不明の土師質土器も含む）19点、須恵器14点である。周辺からの流れ込みであるため、水田址と比較的時期の近い遺物と考えられる。

中世の遺物は陶磁器類、鉄製品、石製品等が出土した。陶磁器類は舶載陶磁（青磁11点・白磁１点）12点、瀬戸系陶器２点、（瀬戸系茶碗１点）、陶器４点、軟質陶器１点、磁器１点、かわらけ２点が出土している。特に舶載陶磁は12世紀末～16世紀のもので、全て中国産であり、竜泉窯系も１点認められる。ほとんどが碗皿類に分けられる。かわらけは２点出土した。いずれも灯明皿の破片である。鉄製品は槍（？）、鉄鏃（？）の武器の他、掛け金具、釘といった建具も出土した。石製品は砥石が２点出土した。第18図２は頁岩製の仕上砥、第18図１は軽石製で研磨痕が数条観察される。

2　近世の遺物

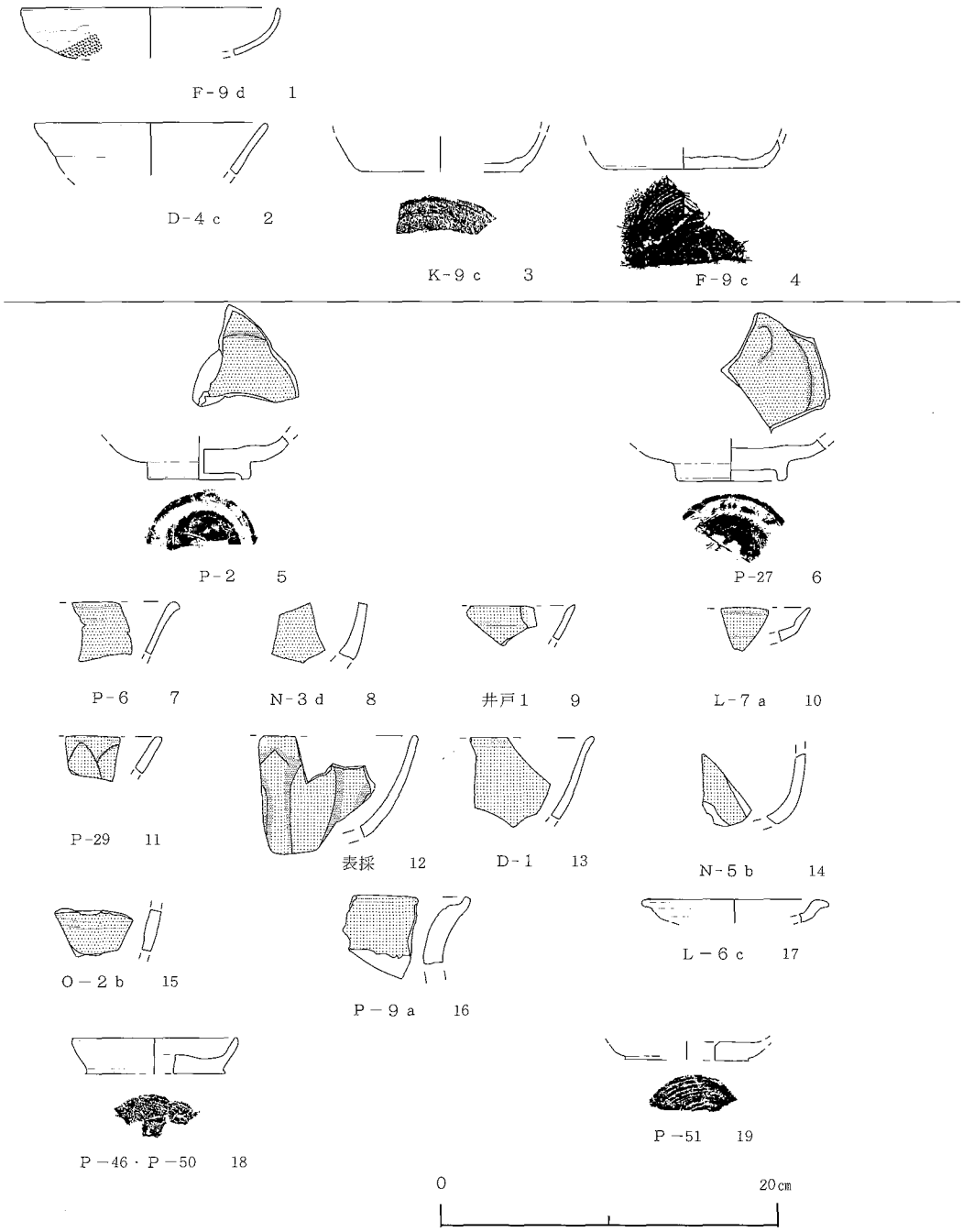
近世の遺物は銅銭２枚と陶磁器２点（天目茶碗１点、京焼茶碗１点）である。第18図７は清銭（中国銭）の嘉慶通宝（1796～1820年）である。

（井上慎也）

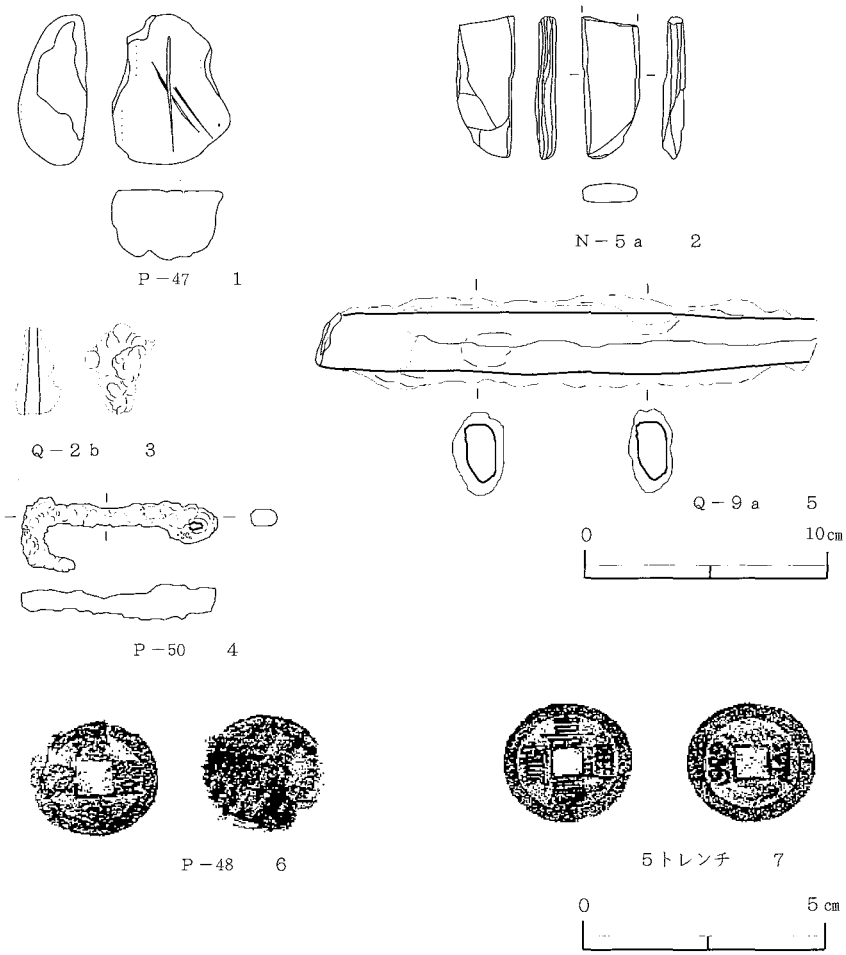
（単位：ｃｍ）

挿図No.	番号	出土位置	種類	器種	色調	口縁直径	底部直径	備考
第17図	1	F-9 d	土師器	坏	橙色	(15.0)		
	2	D-4 c	須恵器	坏	灰白色	(13.4)		底部回転糸切り後、周辺箆削り
	3	K-9 c	須恵器	坏	灰色		(9.2)	
	4	F-9 c	須恵器	坏	灰色		(9.2)	
	5	P－2	青磁	高台付皿	オリーブ灰色		(6.2)	14～15世紀／中国産
	6	P－27	青磁	高台付皿	オリーブ灰色		(6.2)	14～15世紀／中国産
	7	P－6	青磁	碗	明緑灰色	(11.4)		15世紀？／竜泉窯系
	8	N-3 d	青磁		オリーブ灰色			13世紀／中国産
	9	I－1号井戸	青磁	碗	オリーブ灰色	(13.6)		15～16世紀／中国産
	10	L-7 a	青磁	坏	明オリーブ灰色	(13.0)		13世紀／中国産
	11	P－29	青磁	碗	オリーブ灰色			片切彫／14世紀／中国産
	12	表採	青磁	碗	明緑灰色	(15.0)		片切彫／中国産
	13	D－1	青磁	碗	灰白色	(15.0)		12世紀末～13世紀／中国産
	14	N-5 b	青磁	坏	オリーブ灰色			15世紀？／中国産
	15	O-2 b	陶器	坏	にぶい赤褐色			
	16	P-9 a	陶器		にぶい赤褐色	(17.0)		
	17	L-6 c	灰釉陶器	皿	緑灰色	(11.0)		中世／瀬戸系
	18	P－46・50	土師質土器	皿	にぶい橙色	(9.6)		中世
	19	P－51	土師質土器	皿	にぶい橙色		(7.2)	

第９表　土器・陶磁器観察表


F-9 d 1
D-4 c 2
K-9 c 3
F-9 c 4
P-2 5
P-27 6
P-6 7
N-3 d 8
井戸1 9
L-7 a 10
P-29 11
表採 12
D-1 13
N-5 b 14
O－2 b 15
P－9 a 16
L－6 c 17
P－46・P－50 18
P－51 19
0
20cm

第17図　土器実測図



挿図No.	番号	出土位置		器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
第18図	1	P－47	HT-3	砥石	軽石	61.0	49.0	27.5	43.0	仕上砥石
	2	N-5a	HT-3, HT-4	砥石	Sh	57.5	24.0	8.7	15.1	
	3	Q-2b		鉄製品		2.5	3.6	1.3	14.7	
	4	P－50	HT-3	掛け金具		7.9	1.8	1.1	20.7	
	5	Q－9a		刀子		(20.3)	3.7	2.4	234.8	
	6	P－48	HT-5	古銭		2.4			2.4	
	7	5トレンチ		古銭		2.5			3.4	嘉慶通宝、清銭

第10表　石器・鉄製品・銅銭観察表

第18図　石器・鉄製品・銅銭実測図

Ⅷ　成果と問題点

1　中宿在家Ⅱ遺跡のAs－B層直下水田址の性格

中宿在家Ⅱ遺跡の立地する微高地（自然堤防）は、Ⅰ－1号井戸からAs－C層が確認されているので、4世紀前葉以降には形成されていたと推測される。また、中宿在家Ⅱ遺跡及び中宿在家遺跡からはAs－B層直下水田址が検出されたが、この水田址以前に形成されたと考えられる遺構は検出されなかった。したがって、この地域はAs－B層降下以前には居住域としては利用されていなかったと推定される。

また、(株) 古環境研究所に自然科学分析を委託したが、そのうちの「植物珪酸体（プラント・オパール）分析」（註1）で、稲籾の推定生産量を分析している。K－17グリッドについて仮に2から4の3層にわたって稲作が行われていたと仮定し、その層の10a当たりの生産量を計算し、当時の年間生産量を10aあたり100kgと仮定すると、128.6年間稲作が行われていたと推定される。同様にE－2グリッドについて同様の計算を行うと95.2年間となる。このことから中宿在家Ⅱ遺跡のAs－B層直下水田址では天仁元年にAs－B層に埋没する以前に約95～約130年間稲作が続けられたと推測される。すなわち、10世紀第4四半期～11世紀第1四半期にこの調査区の稲作が開始されたと推測される。

一方、水田の区画や地割りについてはいくつかの類型が提起されている（註2）が、中宿在家Ⅱ遺跡の水田址は碓氷川低地帯に立地し、その水田址の畦畔の配列は不規則である。また、畦畔の一部が開口され水口としてそれぞれの水田へ給水するようになっている。これは工楽善通氏のB類あるいは横倉興一氏のD（不規則水田）に該当するものである。この水田区画が採用されたのは立地的な理由と年代的な理由が考えられる。また、中宿在家Ⅱ遺跡の水田址はAs－B層直下の水田址であるが、As－B層を掘り返したりなどの復旧された形跡がなかったので、As－B層が降下した後そのまま放棄されたと推定される。

註1　「Ⅷ　自然科学分析」の中の「2　植物珪酸体（プラント・オパール）分析」を参照のこと。

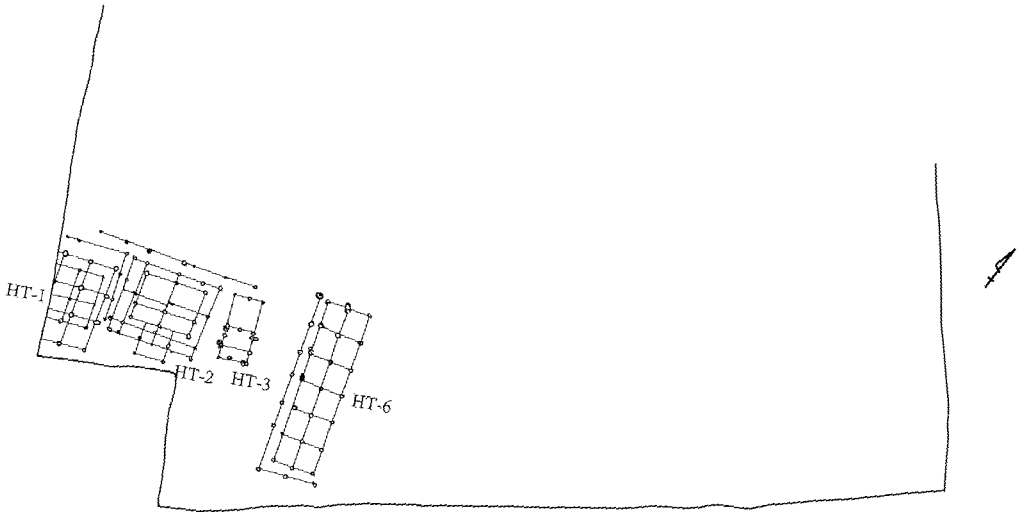
註2　工楽善通氏は水田を立地・区画・水路等からA類～D類の4つに分類する（工楽善通　1991「Ⅳ　水田経営の立地と区画　1　土地を選ぶ」『水田の考古学』p51～56　東京大学出版会）。横倉興一氏は、水田の一町区画の内部の区割を、重複関係がつかめる高崎市日高遺跡からA、B、C、D、Hに分類し、A・Bは9世紀後半頃に遡り得るとして、(+)→A・B（半折型水田）→C・D（不規則水田）→H（長地型水田）と移り、Hの下限が11世紀末という変化を示すという（岩本次郎　1994「古代における地割の展開と稲作」、『古代日本の稲作』p125～126　雄山閣）。

2　掘立柱建物址群について

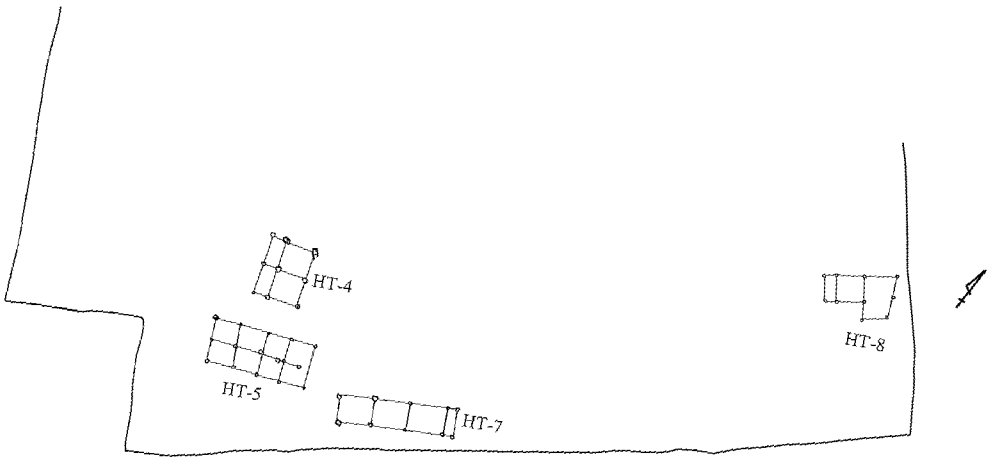
本遺跡からは８棟の掘立柱建物址が検出された。検出された掘立柱建物址群の主屋は規模や構造からHT－１号掘立柱建物址あるいはHT－２号掘立柱建物址と考えられ、その東に位置するのは主屋に付属する建物群であると思われる。また、HT－４・HT－５号掘立柱建物址とHT－６号掘立柱建物址は重複しているので、その時期差が推定される。建物の南北軸の角度からHT－１・２・３・６号掘立柱建物址は同時期であり、これらが造られる前にHT－４・５・７号掘立柱建物址が存在していたと考えられる。HT－２号掘立柱建物址の北側から検出された１号柱穴列はその方向がHT－２号掘立柱建物址の東西軸に平行なので、この建物に付属するものと考えられる。HT－８号掘立柱建物址は他の掘立柱建物址群と離れているが、調査区外にある建物と他の館を構成するか、あるいは西側が出入り口であるので神社的建物あるいは仏堂的建物であったとみられる。

一方、中宿在家Ⅱ遺跡の南方から検出された中宿在家遺跡Ⅵ区から掘立柱建物址群が検出されているが、主屋は東西５間に南北２間で四周に庇を持つ２号掘立柱建物で、副屋はそのすぐ西にある４号掘立柱建物で東西２間に南北５間で四周に庇をもつ建物である。この西側に東西２間に南北３間で北側に庇がつく５号掘立柱建物・東西２間に南北２間の６号掘立柱建物・東西２間に南北２間で東側と南側に庇がつく７号掘立柱建物が南北に並んでいた。また、４号掘立柱建物の南側から柵列が検出されており、その方向は２・４号掘立柱建物の東西軸と平行しているので、この掘立柱建物群に付属するものと考えられる。中宿在家遺跡Ⅵ区における西側に主屋がありその東側に付属する建物があるという建物群の配列は、中宿在家Ⅱ遺跡の掘立柱建物址群１期と類似している。また、中宿在家遺跡の館址と同様に堀あるいは溝、または土居による区画は見受けられなかった。

以上のことから当遺跡の掘立柱建物址群Ⅰ期は中宿在家遺跡Ⅵ区の掘立柱建物址群と同時期と考えられる。また、多数の舶載当時の存在から武士クラスの人物が想定される。

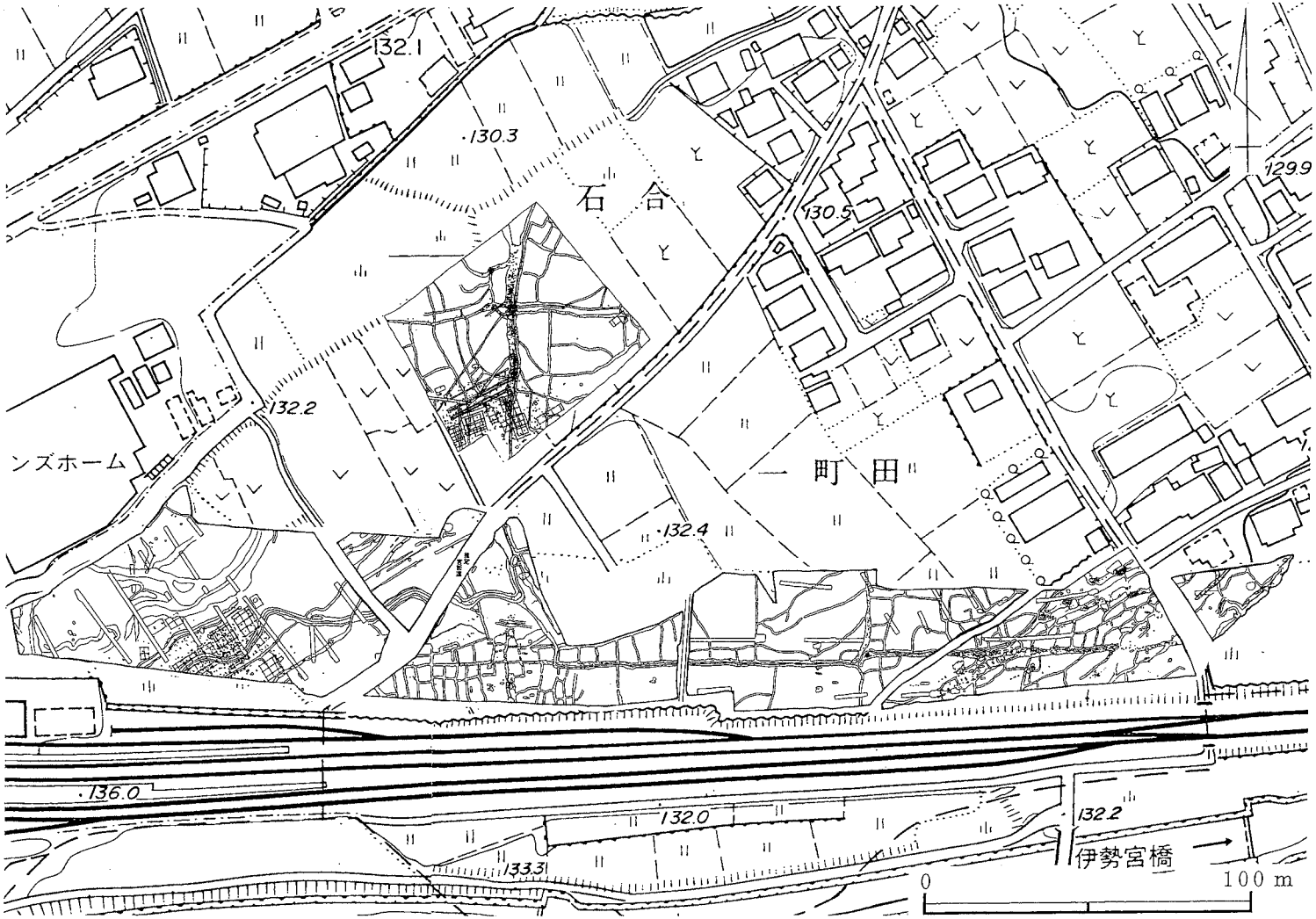


Ⅰ期

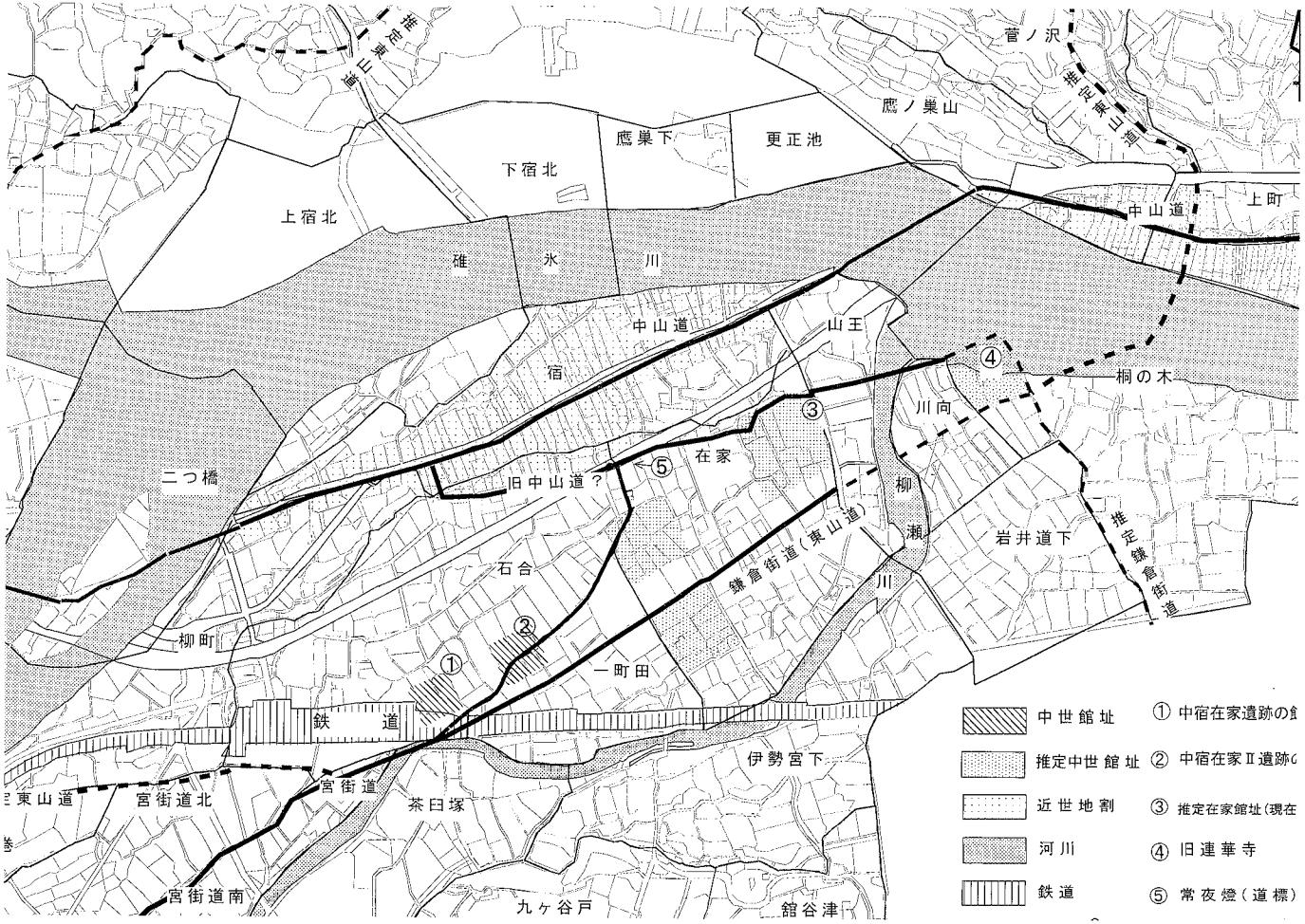


Ⅱ期

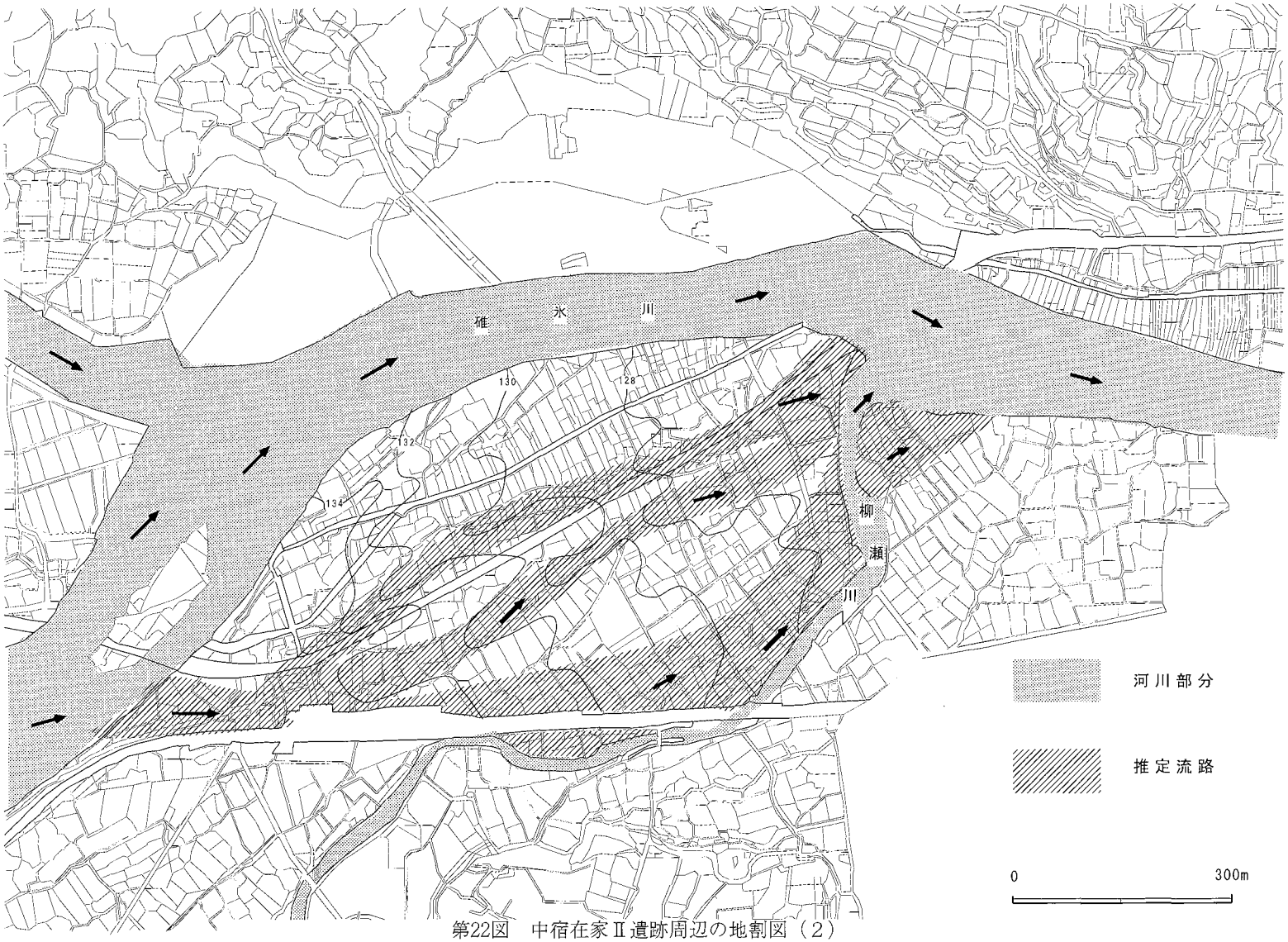
第19図　中世掘立柱建物址時期別配置図（S＝1/400）



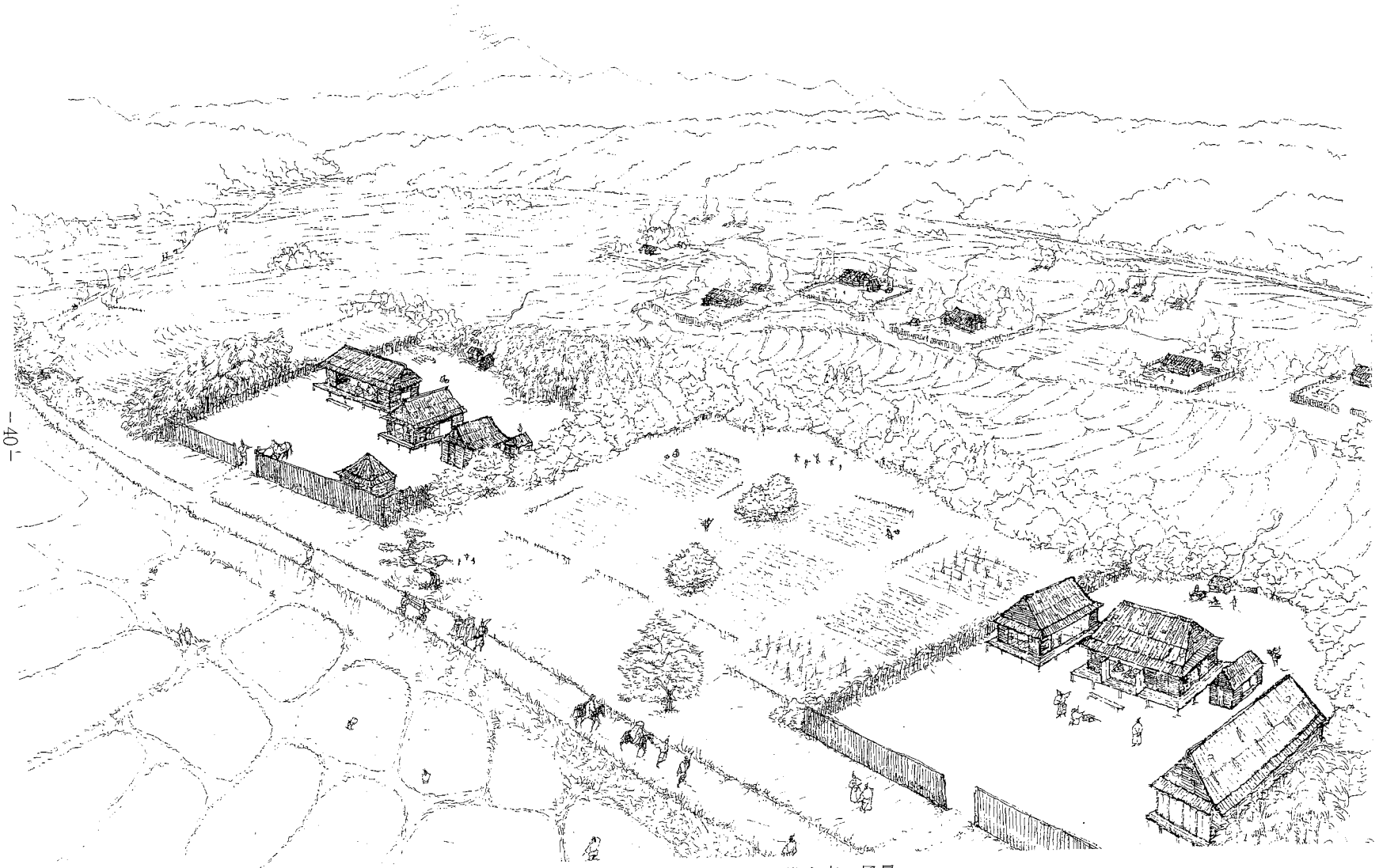
第20図　中宿在家遺跡・中宿在家Ⅱ遺跡全体図



第21図　中宿在家Ⅱ遺跡周辺の地割図（1）

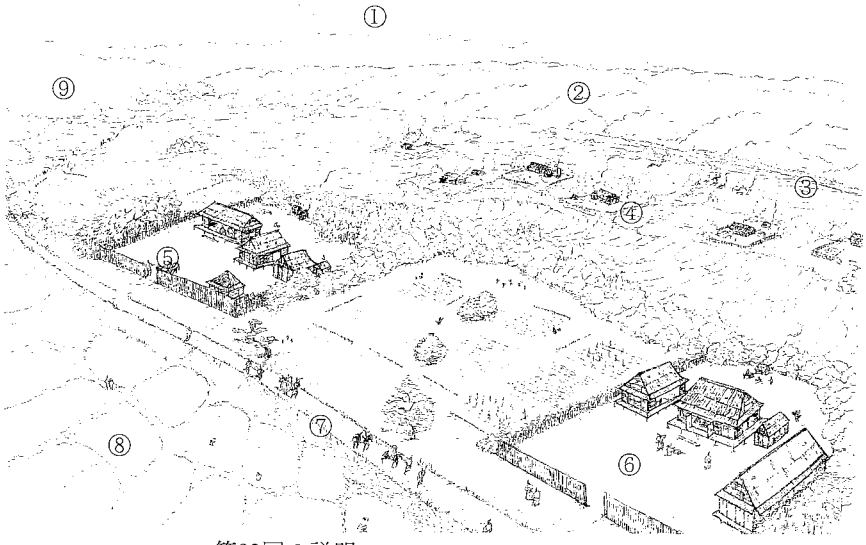


第22図　中宿在家Ⅱ遺跡周辺の地割図（2）



第23図　南東上空から見た中世中宿の風景

第24図　西上空から見た中世中宿の風景



第23図の説明

①浅間山
②秋間丘陵
③碓氷川
④農民の家
⑤中宿在家遺跡の館址
⑥中宿在家Ⅱ遺跡の館址
⑦中世東山道（鎌倉街道）
⑧水田
⑨碓氷川上位段丘

第24図の説明

①赤城山
②鷹巣の断崖
③碓氷川
④「旧蓮華寺」
⑤「在家館址」（現在の蓮華寺。）
⑥一族衆の館（濠を持つ。）
⑦中宿在家Ⅱ遺跡の館址
⑧中宿在家遺跡の館址
⑨中世東山道（鎌倉街道）
⑩柳瀬川

第25図　復元図の説明

3　中世の中宿について

今回の発掘調査で、中宿在家Ⅱ遺跡周辺には、中宿在家遺跡の調査と合わせて、軍事的・経済的に重要な拠点があることが明らかとなった。さらに、「在家」や「一町田」といった荘園や条理地割りに関連した地名と蓮華寺周辺に見られる地割りから推測して、宮街道沿いに幾つかの中世の館址の存在が考えられる（第21図）。この中でも方一町の規模を測る現在の蓮華寺は、中宿周辺の領主の館（在家館址）であったと推測される。また、中宿在家遺跡及び中宿在家Ⅱ遺跡の館の主は、その規模から「在家館址」の領主に属する郎党であると考えられる。なお、中世の蓮華寺は碓氷川と柳瀬川の合流地点より下流にあったと云われている（第21図）が、洪水によって流されたので、現在の場所に移転したという（第22図）。中世の蓮華寺のあった場所は墓地となっている。

（深町　真）

参考文献

坂井　隆・友廣哲也・石井榮一　1997　『中宿在家遺跡・上豊岡一里塚遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

千田茂雄　1991　『九十九川沿岸遺跡群1』　安中市教育委員会

千田茂雄　1992　『九十九川沿岸遺跡群2』　安中市教育委員会

千田茂雄　1994　『九十九川沿岸遺跡群3』　安中市教育委員会

大工原　豊・千田茂雄　1988　『古城遺跡』　安中市教育委員会

大工原　豊・金井京子　1992　『田中田・久保田遺跡』　安中市教育委員会

大工原　豊・深町　真・井上慎也・金井京子・中澤信忠　1998　『上ノ久保遺跡・桜林遺跡・五ヶ遺跡』安中市教育委員会

安中市誌編纂委員会編　1964　『安中市誌』　安中市

岩本次郎　1994　『古代日本の稲作』　雄山閣

工楽善通　1991　『水田の考古学』　東京大学出版会

Ⅸ　自然科学分析

株式会社　古環境研究所

1　地質分析

（1）はじめに

中宿在家Ⅱ遺跡の発掘調査では、テフラに埋もれた水田遺構が検出された。そこで微化石分析に先だって土層断面の地質調査を行い、土層の層序の記載を行った。土層の調査を行った地点は、K－17グリッドおよびE－2グリッドの2地点である。

（2）土層の層序

a. K－17グリッド（第26図）

本地点の土層を、柱状図にして第26図に示す。ここでは、下位より灰色土（層厚15cm以上）、黄灰色砂層（層厚4cm）、灰色土（層厚6cm）、黄色砂混じり黄褐色土（層厚2cm）、成層したテフラ層、黄灰色砂層（層厚1cm）、褐色砂質土（層厚2cm）、灰色砂層（層厚15cm）、葉理の発達した灰色砂層（層厚5cm）、成層したテフラ層、黄灰色砂層（層厚2cm）、褐灰色砂質土（層厚9cm）、表土盛土（層厚33cm）が認められる。

2層の成層したテフラ層のうち、下位のテフラ層は、下位より灰色粗粒火山灰層（層厚0.3cm）、褐色軽石層（層厚1cm，軽石の最大径20mm）、褐色細粒軽石層（層厚3cm，軽石の最大径2mm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚1cm）、橙色岩片混じり褐色細粒軽石層（層厚2cm，軽石の最大径4mm，石質岩片の最大径2mm）、灰色細粒火山灰層（層厚0.4cm）、黄色細粒軽石層（層厚7cm，軽石の最大径4mm，石質岩片の最大径2mm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚0.3cm）、灰色がかった暗褐色粗粒火山灰層（層厚0.4cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚0.3cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚0.2cm）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚0.6cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚0.4cm）、褐色細粒軽石層（層厚1cm，軽石の最大径2mm）、桃色細粒火山灰層（層厚1cm）、灰色細粒火山灰層（層厚0.8cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚3cm）の連続から構成される。このテフラ層は、層相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As－B、新井,1979）に同定される。

一方、上位の成層したテフラ層は、下部の黄灰色粗粒火山灰層（層厚0.5cm）と上部の青灰色細粒火山灰層（層厚0.4cm）から構成されている。このテフラ層は、層相から1128（大治3）年に浅間火山から噴出した浅間粕川テフラ（As－Kk、早田，1991，1995）に同定される。

なお水田遺構は、これらの土層のうちAs－Bの直下から検出されている。

b. E－2グリッド（第27図）

この地点では、下位より灰色土（層厚5cm以上）、暗灰色土（層厚7cm）、上位の黄灰色軽石混じり暗灰色土（層厚3cm）、成層したテフラ層、灰色砂層（層厚6cm）、黄灰色砂層（層厚0.7cm）、褐色砂質土（層厚6cm）、青灰色細粒火山灰層（層厚1cm）、灰褐色土（層厚11cm）、盛土（層厚26cm）が認められた。

これらの土層のうち、成層したテフラ層は、下位より黄色細粒軽石層（層厚1cm，軽石の最大径2mm）、粗粒の褐色軽石を混じえる褐色軽石層（層厚2cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚0.3cm）、橙色岩片混じり褐色細粒軽石層（層厚2cm）、灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚7cm）から構成されている。このテフラ層は、上部が削剥を受けているものの、層相からAs－Bに同定される。ここでもこのAs－B直下から水田遺構が検出されている。なお全体としては、前述のK－17グリッドの方がAs－Bの状態が良好である。

（3）小結

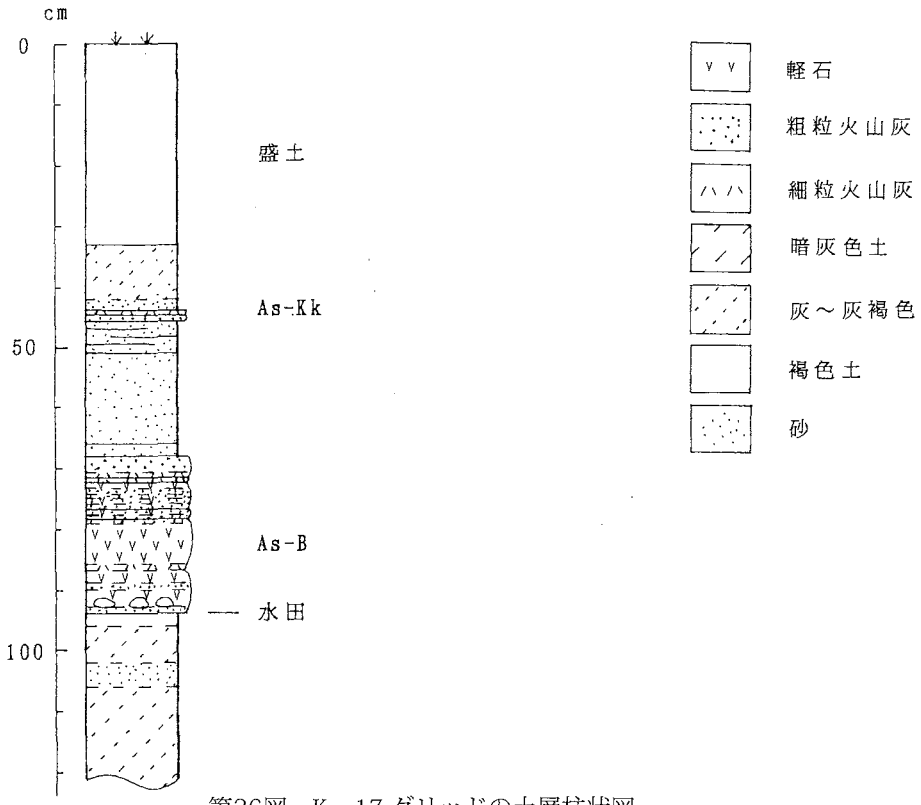
中宿在家Ⅱ遺跡において、地質調査を行い土層の記載を行った。その結果、下位より浅間Bテフラ（As－B、1108年）および浅間粕川テフラ（As－Kk、1128年）の2層のテフラが検出された。本遺跡で検出された水田遺構の層位は、As－B直下にある。

参考文献

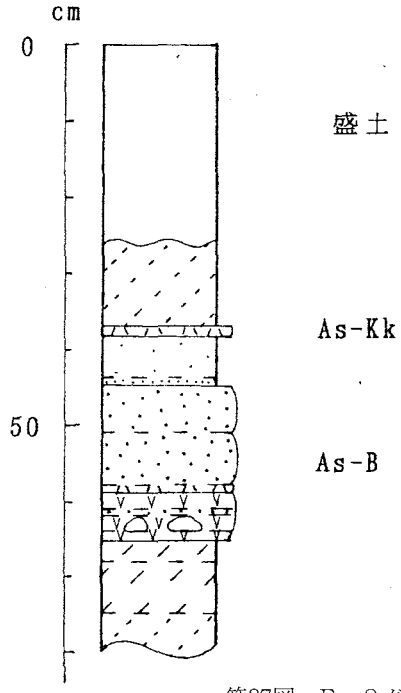
新井房夫　1979「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル』No.157　p.41－52.

早田　勉　1991「浅間火山の生い立ち」『佐久考古通信』No.53　p.2－7.

早田　勉　1995「テフラからさぐる浅間山の活動史」『御代田町誌，自然編』p.22－43.



第26図　K－17グリッドの土層柱状図



第27図　E－2グリッドの土層柱状図

2　植物珪酸体（プラント・オパール）分析

（1）はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生･古環境の推定などに応用されている（杉山, 1987)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984)。

中宿在家Ⅱ遺跡の発掘調査では、As－B直下層から水田遺構が検出された。そこで、同遺構における稲作の検証を主目的として分析を行った。

(2) 試料

試料は、K－17グリッド、K－18グリッド、E－2グリッドの3地点から採取された計12点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

（3）分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料の絶乾（105℃・24時間）
2）試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm・約0.02g）
　※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
3）電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
4）超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
5）沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
6）封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
7）検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10－5g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体

生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属型（ススキ）は1.24、タケ亜科（ネザサ節）は0.48である。

（4）分析結果

水田跡の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（おもにネザサ節）の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を第16表および第28図～第30図に示した。写真1に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

（5）稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体が試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にイネの密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稲作の可能性について検討を行った。

a. K－17グリッド（第28図）

As－B直上層（試料1）と直下層（試料2、3）およびその下層（試料4）について分析を行った。その結果、試料1を除く各試料からイネが検出された。このうち、As－Bの下層（試料4）では密度が7,100個/gと高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。As－B直下層（試料2、3）では、密度は700～3,000個/gと比較的低い値であるが、直上をAs－B層で覆われていることから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層準の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

b. K－18グリッド（第29図）

As－B直下確認面から採取された試料1～4について分析を行った。その結果、これらのすべての試料からイネが検出された。密度は7,500～9,200個/gと高い値である。したがって、同確認面では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

c. E－2グリッド（第30図）

As－Kk直下層（試料1）、As－B直下層（試料2、3）およびその下層（試料4）につい

て分析を行った。その結果、試料1を除く各試料からイネが検出された。このうち、As－B直下層（試料２、３）では密度が3,900～7,100個/g、その下層（試料４）でも7,500個/gと高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(6) まとめ

以上のように、水田遺構が検出されたAs－B直下層および同確認面からはイネの植物珪酸体が多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、As－Bの下層でも稲作が行われていた可能性が認められた。

参考文献

藤原宏志　1976「プラント･オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学９』p.15－29

藤原宏志・杉山真二　1984「プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学17』p.73－85

杉山真二　1987「遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点」『植生史研究第2号』p.27－37

分類群／試料	K－17グリッド				K－18グリッド				E－2グリッド			
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
イネ		7	30	71	76	92	86	75		39	71	75
ヨシ属				16	15	15	16	7		31	32	8
ススキ属型		7	22	8	31	38	23	7	8	31	32	15
タケ亜属	7	30	30	31	31	38	31	37		63	64	75

検出密度（単位：×100個 /g）

イネ		0.22	0.87	2.07	2.25	2.71	2.52	2.20		1.15	2.10	2.22
（イネ籾）		0.08	0.30	0.73	0.79	0.95	0.88	0.77		0.40	0.74	0.78
ヨシ属				0.99	0.96	0.97	0.98	0.47		1.98	2.00	0.48
ススキ属型		0.09	0.27	0.10	0.38	0.48	0.29	0.09	0.10	0.39	0.39	0.19
タケ亜属	0.04	0.14	0.14	0.15	0.15	0.18	0.15	0.18		0.30	0.30	0.36

推定生産量（単位：×kg / ㎡・cm）

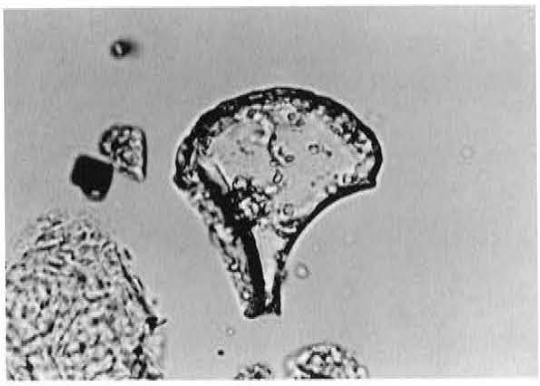
第16表　中宿在家Ⅱ遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）分析結果

※主要な分類群について計数

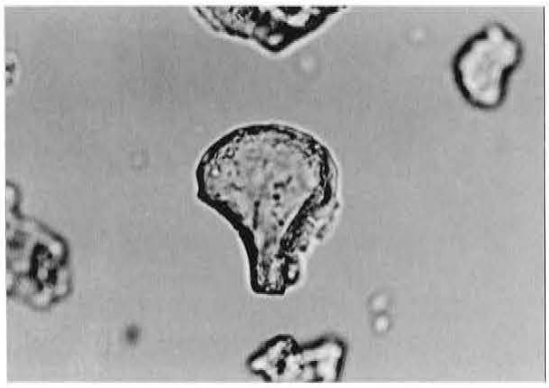
NO.	分 類 群	地点	試料名
1	イネ	E－2グリッド	4
2	イネ	K－17グリッド	2
3	イネ（側面）	K－18グリッド	1
4	ヨシ属	E－2グリッド	2
5	ススキ属型	K－18グリッド	1
6	ネザサ節型	K－18グリッド	3

第17表　植物珪酸体の顕微鏡写真

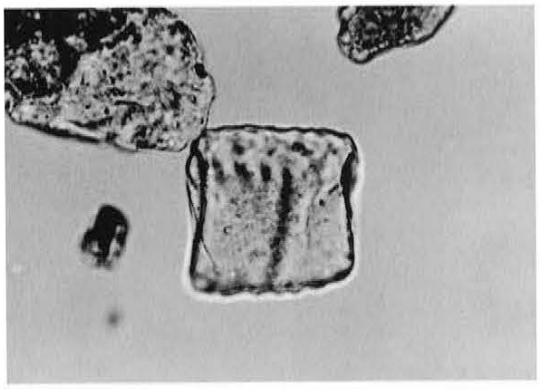
（倍率はすべて400倍）



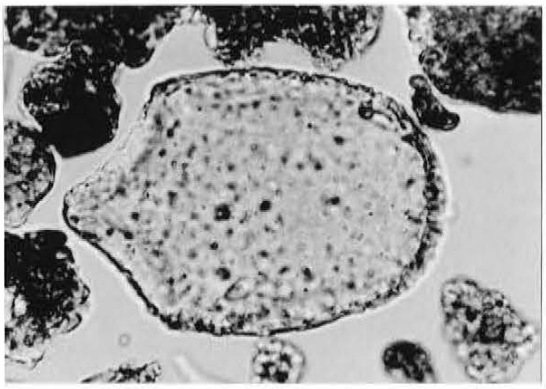
1　イネ



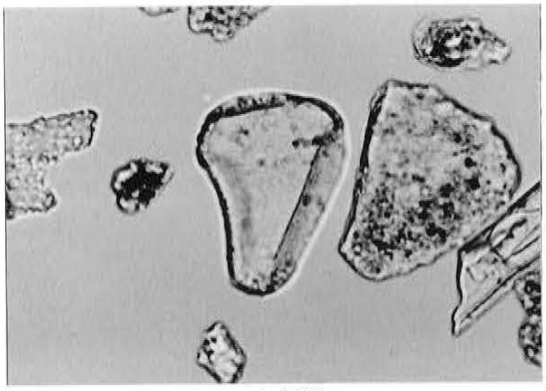
2　イネ



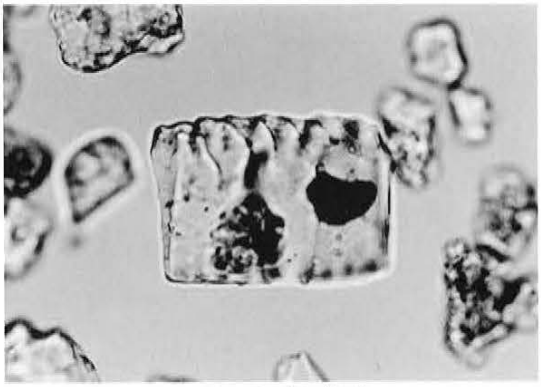
3　イネ（側面）



4　ヨシ属

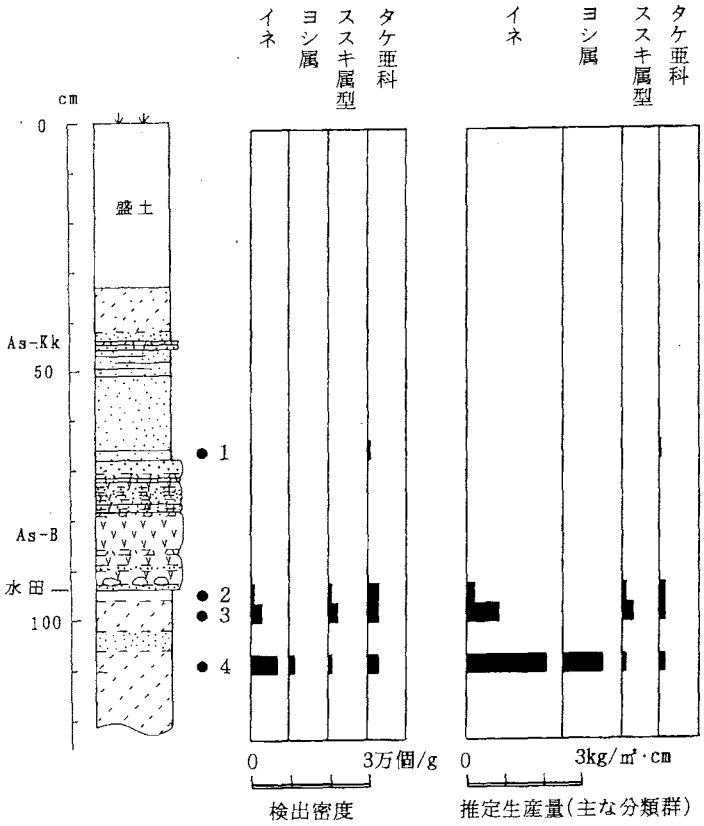


5　ススキ属型

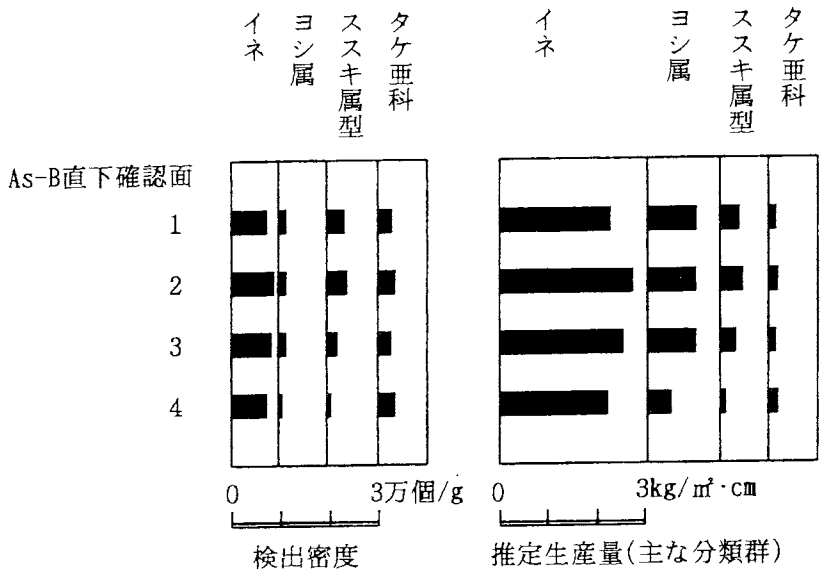


6　ネザサ節型

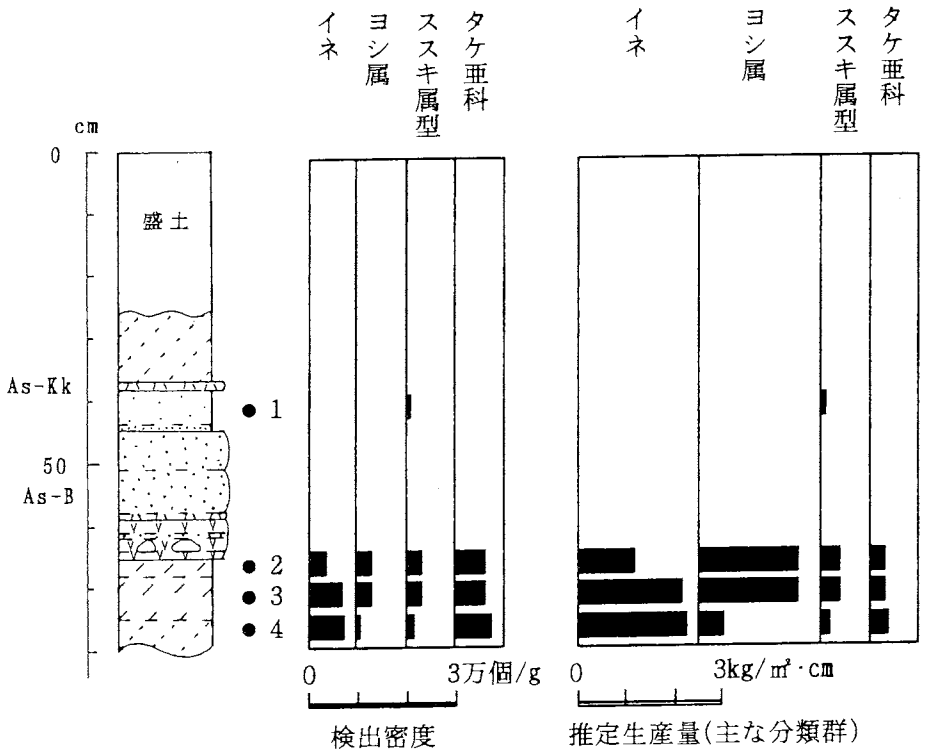
写真１　植物珪酸体の顕微鏡写真



第28図　K－17グリッドの植物珪酸体分析結果（主な分類群について表示）



第29図　K－18グリッドの植物珪酸体分析結果（主な分類群について表示）



第30図　E－2グリッドの植物珪酸体分析結果（主な分類群について表示）

3　花粉分析

（1）試料

試料は、K－18グリッドのAs－B直下確認面およびK－17グリッドのAs－B直下層から採取された２点である。

（2）方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

1）５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

2）水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

3）25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

4）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。

5）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、２分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

（3）結果

出現した分類群は、樹木花粉7、樹木花粉と草本花粉を含むもの１、草本花粉６、シダ植物胞子２形態の計16である。これらの学名と和名および粒数を第18表に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、ハンノキ属、クリーシイ属、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

分析の結果、K－18グリッドのAs－B直下確認面の試料からは、あまり花粉が検出されなかった。傾向としては樹木花粉より草本花粉が多く、特にヨモギ属が多い。他は特徴がつかみにくいが、樹木花粉では風媒花ばかりであり、草本花粉ではタンポポ亜科などキク科が多い。

K－17グリッドのAs－B直下層からは、樹木花粉のスギ、コナラ属アカガシ亜属がわずかに検出された。

浅間Bテフラ（As－B、1108年）直下層の堆積当時は、遺跡周辺はヨモギ属やタンポポ亜科などが生育するような排水のよいやや乾燥した環境であったと推定される。花粉があまり検出されない原因としては、乾湿を繰り返す水田耕作によって花粉が分解されたことが考えられる。

参考文献

中村　純　1973『花粉分析』p.82－110　古今書院

金原正明　1993「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法』p.248－262　角川書店

鳥倉巳三郎　1973「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集』p.60

中村　純　1980「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録第13集』p.91

分類群		K−18グリッド	K−17グリッド
学名	和名		As-B直下水田
Arboreal pollen	樹木花粉		
Pinus subgen.Diploxylon	マツ属複維管束亜属	1	
Cryptomeria japonica	スギ	4	1
Alnus	ハンノキ属	1	
Fagus	ブナ属	1	
Quercus subgen. cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	2	1
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属−ケヤキ	1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		
Moraceae-Urticaceae	クワ科−イラクサ科	1	
Nonarboreal pollen	草本花粉		
Gramineae	イネ科	3	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	
Lactucoideae	タンポポ亜科	4	
Asteroideae	キク亜科	2	
Xanthium	オナモミ属	1	
Artemisia	ヨモギ属	27	
Fern spore	シダ植物胞子		
Monolate type spore	単条溝胞子	8	
Trilate type spore	三条溝胞子	1	
Arboreal pollen	樹木花粉	10	2
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	38	0
Total pollen	花粉総数	49	2
Unknoen pollen	未同定花粉	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	9	0

第18図　中宿在家Ⅱ遺跡における花粉分析結果

4　寄生虫卵分析

（1）試料

試料は、K－18グリッドのAs－B直下確認面およびK17グリッドのAs－B直下層から採取された２点である。

（2）方法

微化石分析法を基本に以下のように行った。

1）サンプルを採量する。

2）脱イオン水を加え撹拌する。

3）篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。

4）25%フッ化水素酸を加え30分静置。（２・３度混和）

5）水洗後サンプルを２分する。

6）片方にアセトリシス処理を施す。

7）両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。

8）検鏡・計数を行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、２分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

（3）結果

分析の結果、K－18グリッドのAs－B直下確認面からは低密度ではあるが回虫卵と鞭虫卵が検出された。また、K－17グリッドのAs－B直下層からはわずかに不明虫卵が検出されたが、人に起因する種類ではない。

（4）考察

K－18グリッドのAs－B直下確認面では、低密度ではあるが回虫卵と鞭虫卵が検出され、人糞による汚染が示唆された。ある程度の人口密度のある集落域周辺における汚染、周囲における人糞施肥による汚染などが考えられる。

K－17グリッドのAs－B直下層では、不明虫卵が検出されたが、人に起因するものはなく、人糞施肥を示唆するデータは得られなかった。花粉分析結果でも花粉が極めて少ないことから、乾湿を繰り返す水田耕作によって寄生虫卵も分解された可能性が考えられる。

参考文献

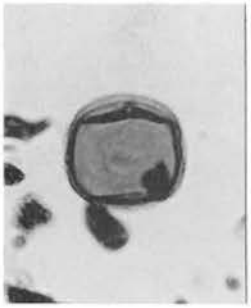
Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard 1992 Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils Jounal of Archaeological Science 19 p.231－245

金原正明・金原正子 1992 「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－』p.14－15 奈良国立文化財研究所

金子清俊・谷口博一 1987 「線形動物・扁形動物」『医動物学，新版臨床検査講座８』p.9－55 医歯薬出版

分類群（試料1/5cc）		K－17グリッド	K－18グリッド
学名	和名	As-B直下水田	
Helminth eggs	寄生虫卵		
Ascaris	回虫卵		3
Trichurs	鞭虫卵		1
Unknown eggs	不明虫卵	1	

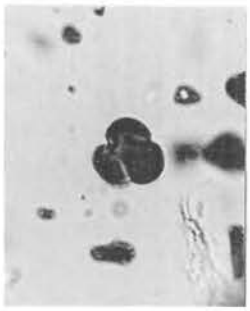
第19表　中宿在家Ⅱ遺跡における寄生虫卵分析結果



1　スギ

2　アブラナ科

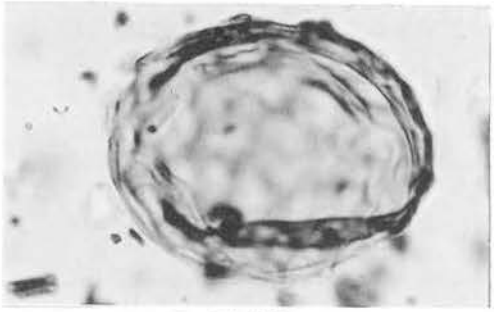
3　オナモミ属



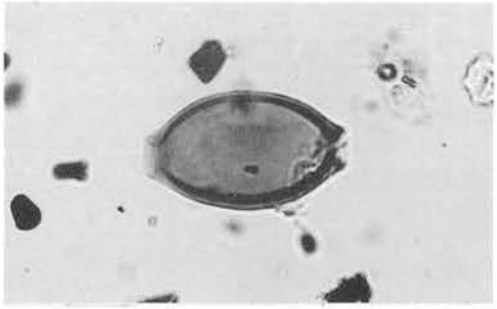
4　ヨモギ属

5　シダ植物単条溝胞子

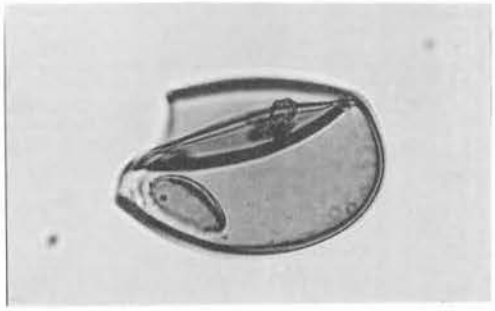
6　シダ植物三条溝胞子



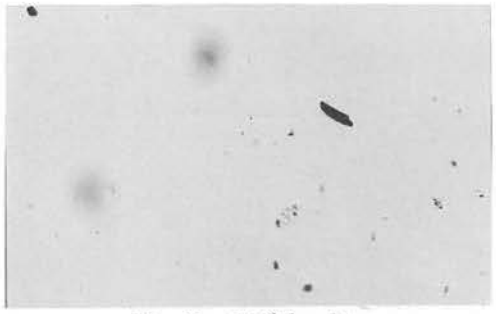
7　回虫卵



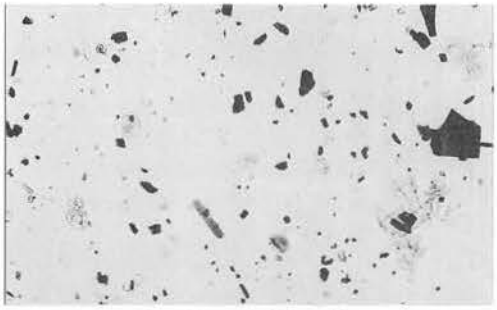
8　鞭虫卵



9　不明虫卵



10　K－17グリッド



11　K－18グリッド

写真２　花粉・寄生虫卵・胞子遺体の顕微鏡写真

5　出土炭化材の樹種同定

（1）試料

試料は、炭化材 D－22号土坑（中世土坑）、炭化材 P－49（HT－1号掘立柱建物址）の2点である。

（2）方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面・放射断面・接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

（3）結果

結果を第20表に示し、各断面の顕微鏡写真を示す。

試　　料	樹　種（和名／学名）
炭化材　D－22号土坑（中世土坑）	コナラ属コナラ節　Quercus sect.Prius
炭化材　P－49（HT－1号掘立柱建物址）	ケヤキ　Zelkova serrata Makino

第20表　中宿在家Ⅱ遺跡出土炭化材の樹木分析結果

a. コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科　　写真3－1

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cm ぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

b. ケヤキ　Zelkova serrata Makino　ニレ科　　写真３－２

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が１～２列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺のみが方形細胞でしばしば大きくふくらんでいる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺の細胞は大型でしばしば大きくふくらんでいる。幅は１～８細胞幅である。

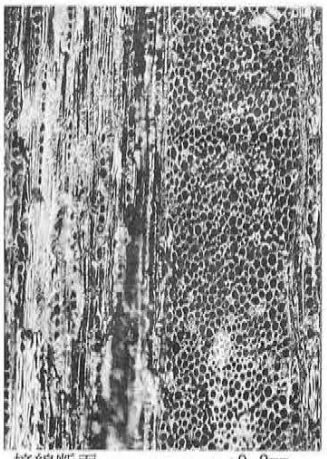
以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ50m、径３ｍに達する。材は強靭で従曲性に富み、建築、器具などに用いられる。

参考文献

佐伯　浩・原田　浩　1985「広葉樹材の細胞」『木材の構造』p.49－100　文永堂出版

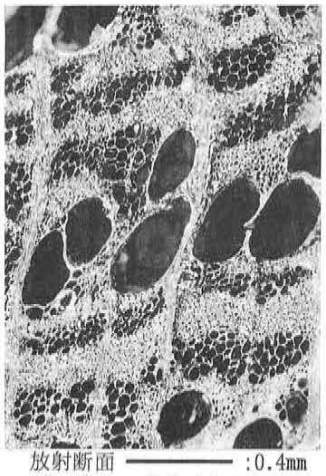
横断面 ―――― :0.4mm

放射断面 ―――― :0.4mm

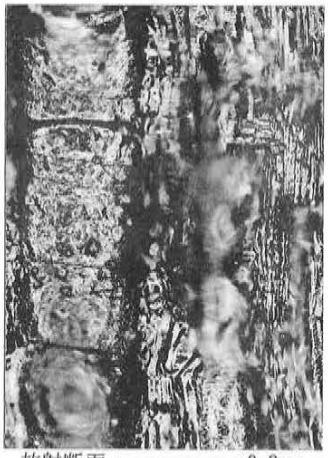


接線断面 ―――― :0.2mm

1　D－22号土坑（中世土坑）　コナラ属コナラ節



放射断面 ―――― :0.4mm



放射断面 ―――― :0.2mm

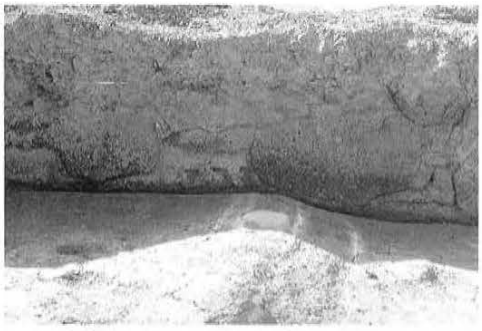
接線断面 ―――― :0.2mm

2　P－49（HT－1号掘立柱建物址）　ケヤキ

写真3　炭化材の顕微鏡写真

写　真　図　版

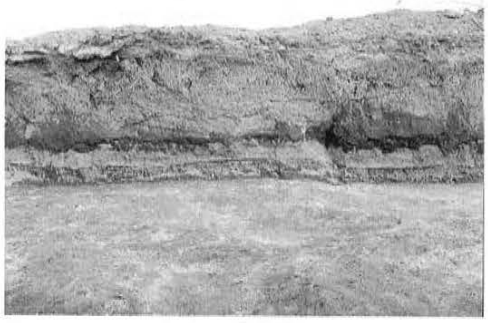
図版 1



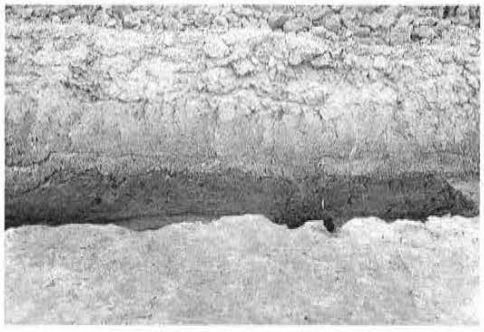
西壁 1 土層断面

東壁 1 土層断面

西壁 2 土層断面

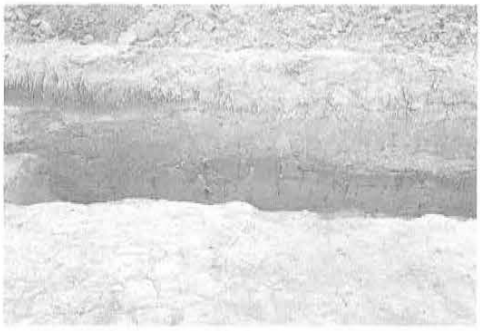


東壁 2 土層断面

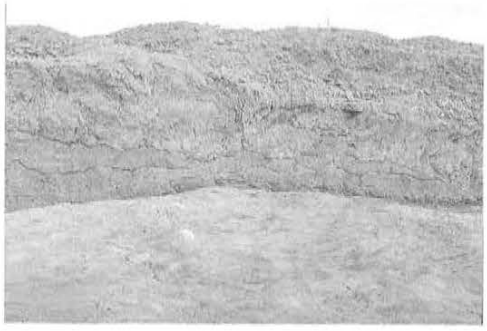


西壁 3 土層断面

東壁 5 土層断面



西壁 4 土層断面

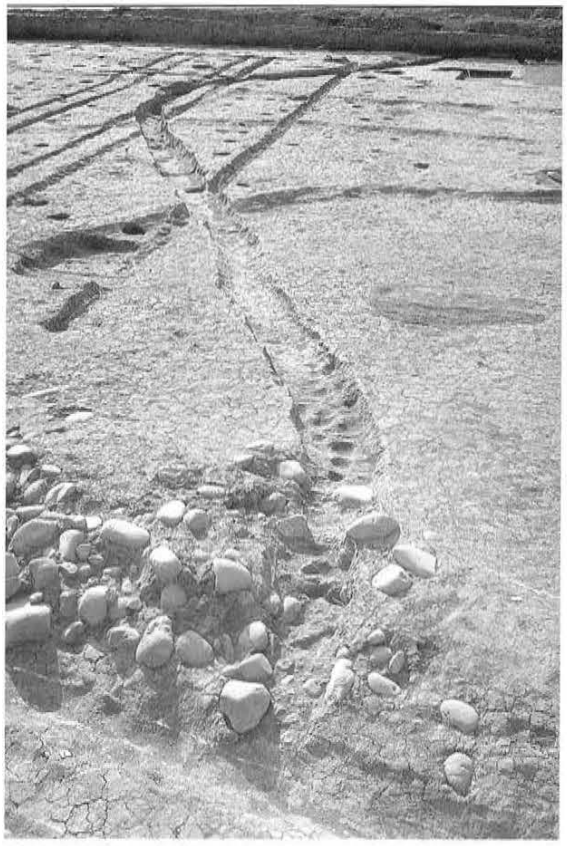


東壁 6 土層断面

Ｍ－３号溝～Ｍ－７号溝

Ｍ－３号溝～Ｍ－７号溝

Ｍ－８号溝西壁土層断面

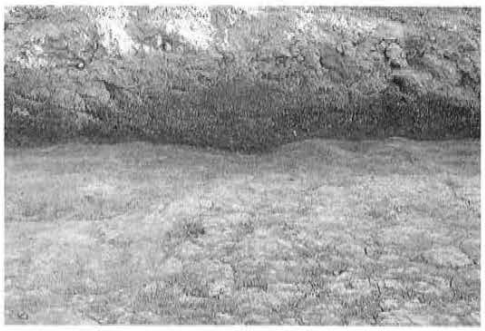


Ｍ－８号溝

Ｍ－８号溝ベルト土層断面

Ｍ－８号溝ベルト土層断面

M－１号溝



M－１号溝南壁土層断面

M－１号溝とM－８号溝

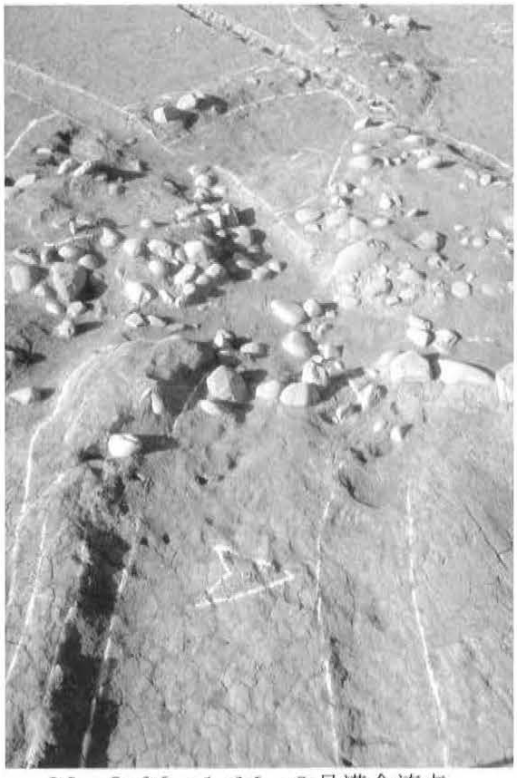
M－１号溝・M－２号溝・M－９号溝

M－１号溝と水口

M－１号溝北端部

Ｍ－２号溝

Ｍ－９号溝

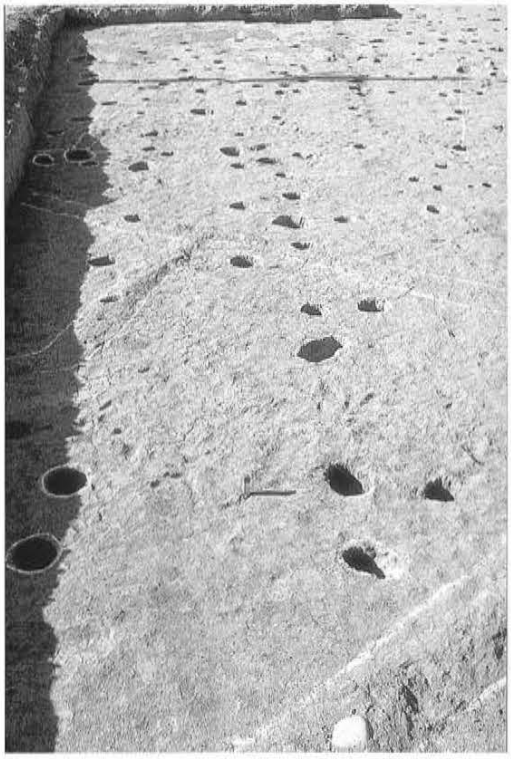


Ｍ－２・Ｍ－１・Ｍ－９号溝合流点

Ｍ－２・Ｍ－１・Ｍ－９号溝合流点

ＨＴ－１・２号掘立柱建物址

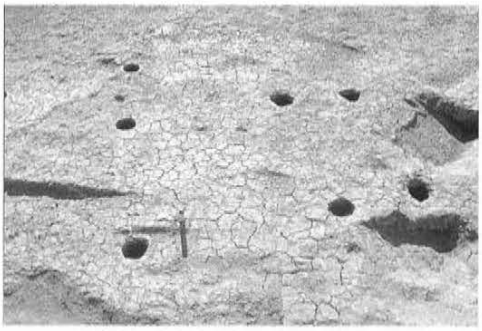
ＨＴ－３号掘立柱建物址



ＨＴ－４・５号掘立柱建物址

ＨＴ－６号掘立柱建物址

ＨＴ－７号掘立柱建物址



ＨＴ－８号掘立柱建物址

抄　　録

ふりがな	なかじゅくざいけにいせき
書　　名	中宿在家Ⅱ遺跡
副　書　名	カインズホーム安中店建替工事に伴う発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	深町　真・井上慎也・(株)古環境研究所
編 集 機 関	安中市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒379-0192　安中市安中一丁目23番13号
発行年月日	西暦1999年5月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかじゅくざいけにいせき 中宿在家Ⅱ遺跡	あんなかしなかじゅく 安中市中宿 あざいしあい 字石合	102113	D-14	36° 19' 47"	138° 55' 11"	19951108- 19951225	約4000㎡	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	記事項
中宿在家Ⅱ遺跡	水田址	平安時代	水田址			As-B層直下
			溝	3		As-B層直下
	館址	中世	掘立柱建物址	8	刀子	2期に分けられる
			竪穴状遺構	1	古銭	掘立柱建物址か
			井戸	1	青磁	ら構成される。
			土坑	19	白磁	
			ピット	多数		
		近世	溝	6		

中宿在家Ⅱ遺跡

－カインズホーム安中店建替工事
に伴う発掘調査報告書－

発　行　日　平成11年５月31日

編集・発行　安中市埋蔵文化財発掘調査団
群馬県安中市安中１－23－13
（安中市教育委員会内）
印　　刷　サカエ印刷
群馬県安中市郷原2767－１